

日本応用心理学会
第 86 回大会プログラム

2019 年 8 月 24 日（土）～25 日（日）
日本大学商学部

表紙 撮 影・デザイン
花 井 雄 也 （アトリエ・フロール株式会社）

日本応用心理学会第 86 回大会 開催のご挨拶

日本応用心理学会第 86 回大会は、ご案内のように 2019 年 8 月 24 日（土）、25 日（日）の 2 日間、日本大学商学部で開催いたします。場所は世田谷区砧（きぬた）です。最寄りの駅は小田急線の祖師ヶ谷大蔵駅です。駅周辺は、以前に円谷英二さんが住んでいた経緯から、ウルトラマン商店街と称しています。本学商学部の近くには、ゴジラで有名な東宝スタジオや東京メディアシティ等があります。世田谷にしては比較的庶民的な雰囲気のある街・映像の街でもあります。

ほんの少し歩くと、広い都立砧公園もあります。公園の奥には世田谷美術館。緑の美しい芝から見上げると、碧空と入道雲。翼が欲しくなるかもしれません。

さて、日本大学と日本応用心理学会とは極めてご縁が深く、1946 年に日本大学の心理学研究室の創設者である渡辺徹先生により戦後の復興第 1 回大会が開催されました。さらに、2004 年の第 71 回大会は本学商学部で開かせていただきました。

本大会では、大会企画シンポジウム、特別講演、を予定しています。また、自主企画ワークショップは 6 演題、口頭研究発表は 9 演題、ポスター研究発表は 74 演題、のお申し込みがありました。例年のように研修会も A および B が企画されています。会員の皆様の貴重な研究成果のご発表と、意欲的なご議論、ご発展をお祈り申し上げます。

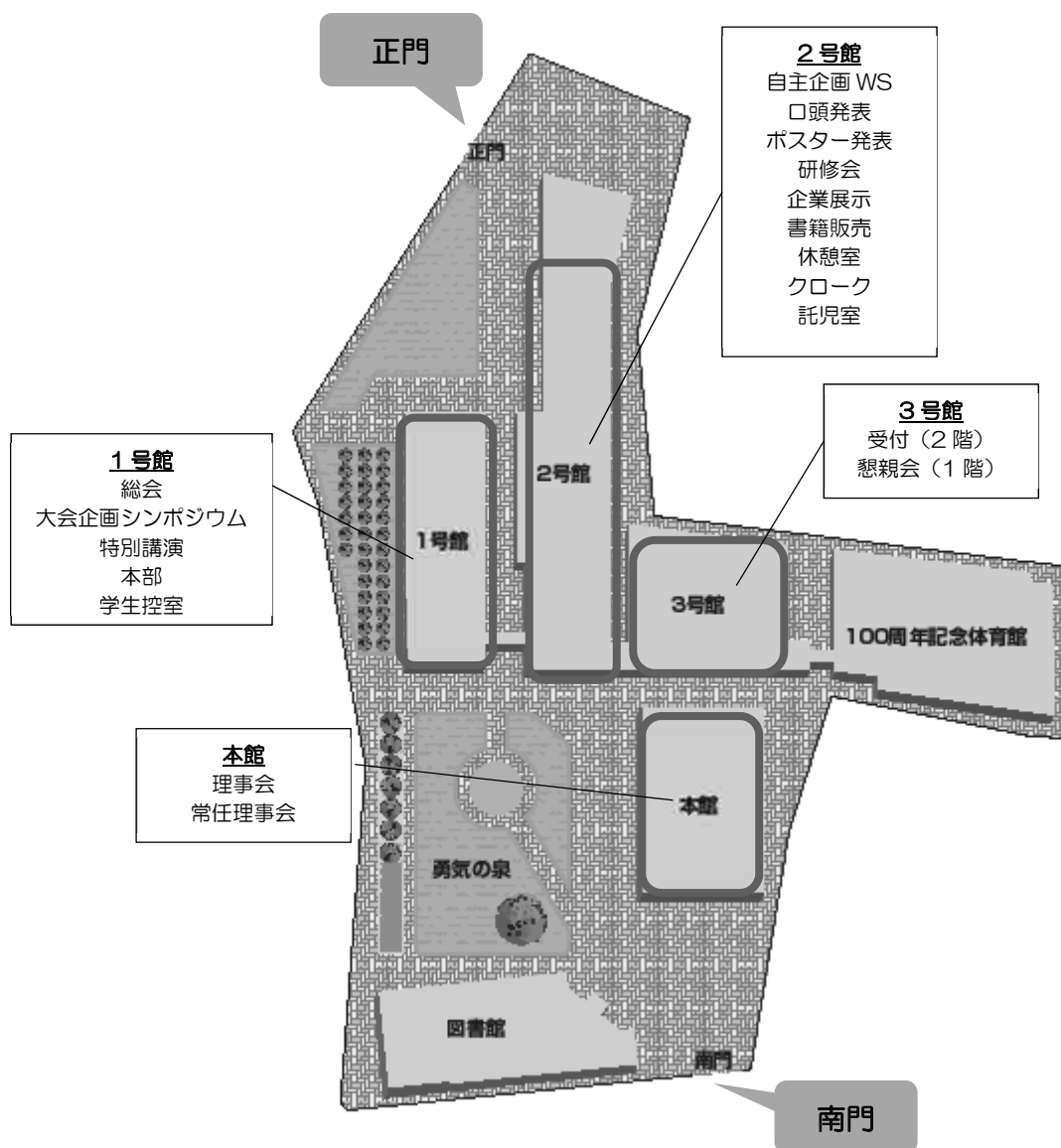
また、本大会では、学会活性化につながる新たな企画として、本学商学部の学部ゼミナール学生の日頃の学修の成果を発表する「教育発表」を予定いたしました。4 年生のみならず 3 年生 2 年生も参加いたします。10 演題の「教育発表」がおこなわれます。社会からの要請に対応するべく公認心理師が国家資格となりました。様々な社会での課題が提起される中で、応用心理学に対する期待はますます強まると思われれます。心理学専攻の学部学生は無論の事、ひろく社会科学を学ぶ学生が、人間行動に理解を深め、学際的な観点からの学修、研究が深まる必要があると考えます。応用心理学という学問・実践の領域があることを若い後進に広げていきたいと思っています。今回の「教育発表」の企画が、今後とも各大会にて引き続き試みられ、多くの若手が応用心理学の領域を志すことを祈念いたします。お名前を研究論文やご著書で拝見している各研究領域でご活躍の諸先生方の警咳に接し、直接のご指導を賜れば幸いです。学生時代の絶対に忘れることのできない貴重な経験となると存じます。

なお、懇親会に於きましては、誠に短い時間ですが、日本大学管弦楽団によりミニコンサートを準備しています。ぜひ、懇親会にご参集ください。

本大会が、会員の皆様のさらなるご発展の一助となりますように、ご参加をお待ち申しあげております。大会スタッフ一同ご支援の努力を申し上げたいと存じます。

日本応用心理学会第 86 回大会委員長 外島 裕

キャンパスマップ

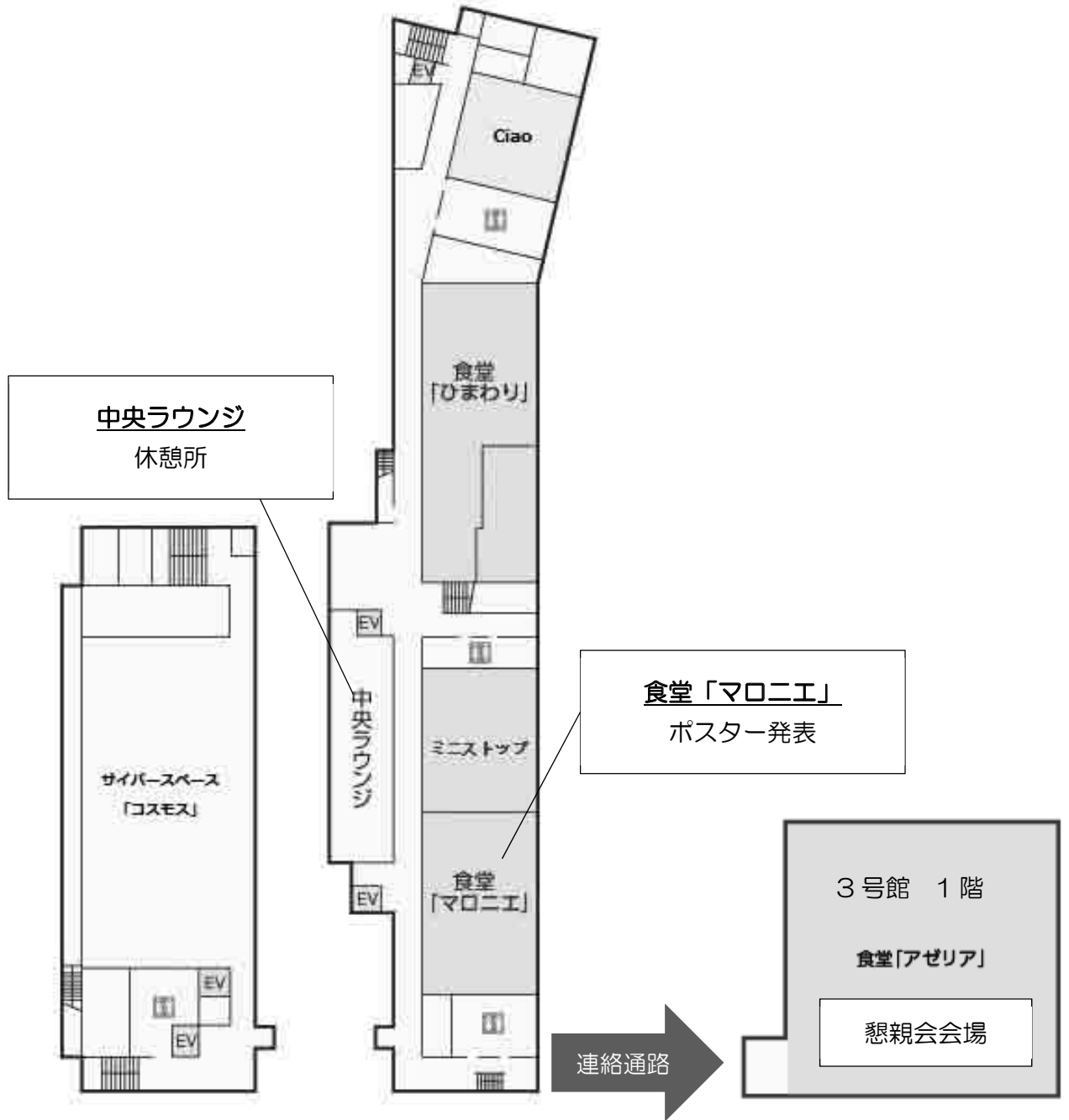


- 大会会場は、本キャンパス 1号館および 2号館です。
1号館と 2号館、3号館は、各階に連絡通路がございます。
- 受付は、3号館 2階にございます。
- 懇親会は、3号館 1階の食堂アゼリアが会場となります。
- 最寄り駅の「祖師ヶ谷大蔵駅」からお越しの場合には、上記マップ上側の「正門」をご利用ください。
「成城学園前駅」からバスをご利用の方は、上記マップ下側の「南門」手前に停車いたします。

館内案内図

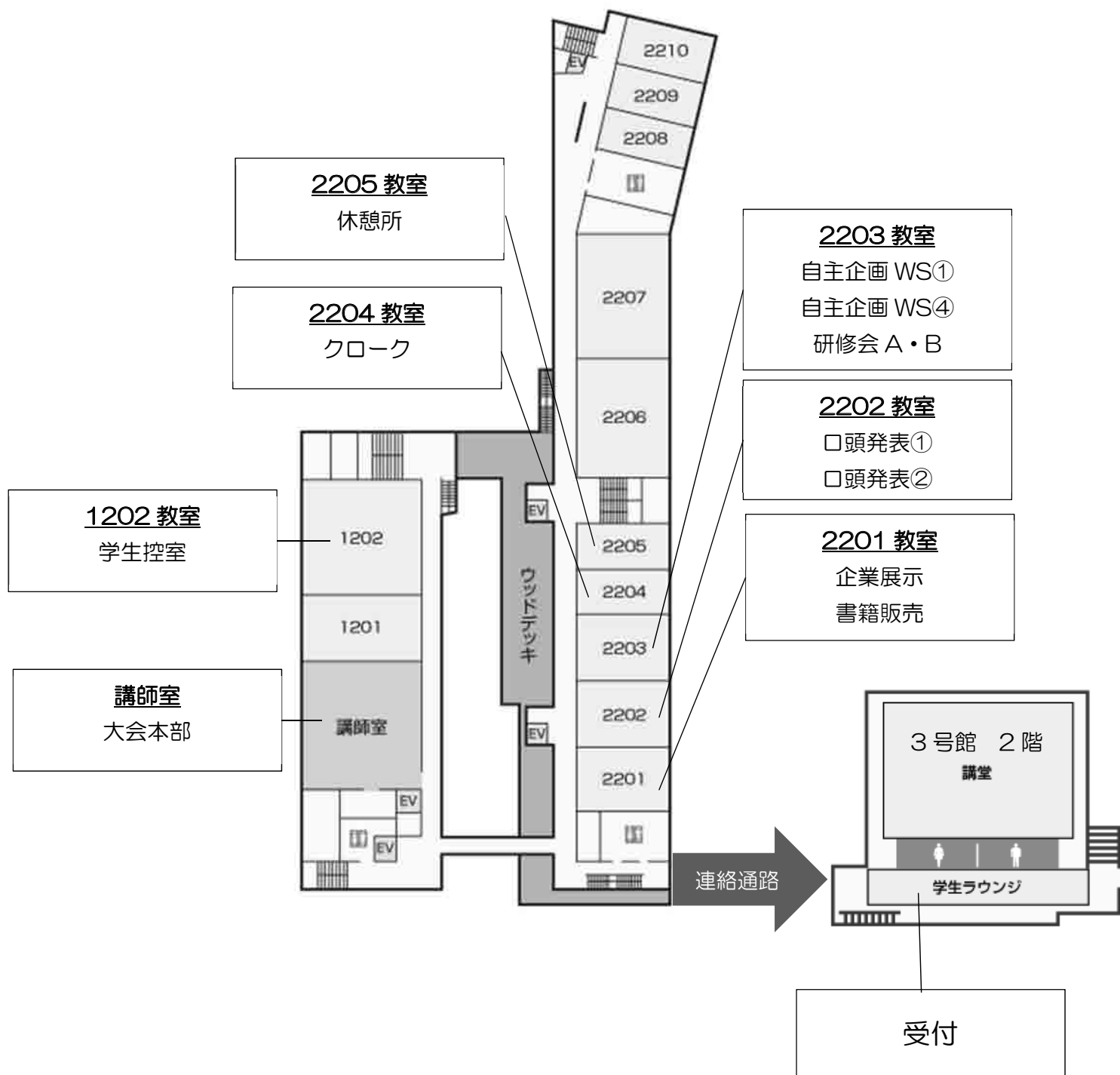
1F

【1号館 ・ 2号館】



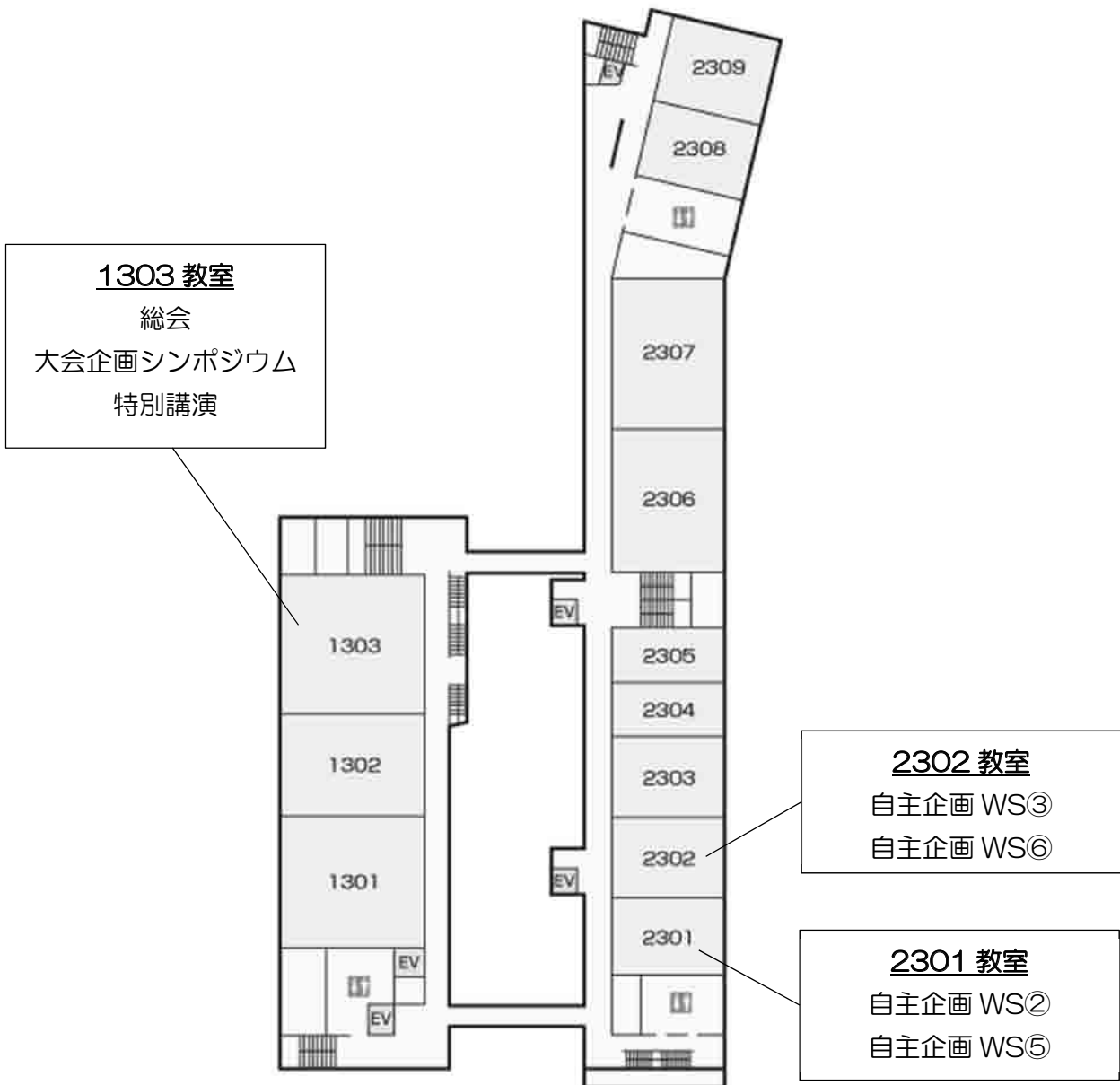
2F

【1号館 ・ 2号館】



3F

【1号館 ・ 2号館】



大会参加者へのご案内

[1] 大会受付

日時：2019年8月24日（土）9：00～17：30 25日（日）9：00～16：00

場所：日本大学商学部 3号館2階階段横

【名誉会員の方】

名誉会員の方は、受付の「総合案内」にお立ち寄りください。名誉会員の方は、大会参加費、発表費、研修会費、懇親会費はすべて無料です。また、大会参加時に発表論文集を1冊贈呈致しますのでお受け取りください。

【事前予約参加の方】

事前予約をされている方は、「事前予約参加者受付」にお立ち寄りください。参加証・領収証と名札入れをお渡しします。大会期間中は参加証を名札入れに入れ、常に身につけてください。発表者（連名発表者を含む）、ワークショップの発表者・企画者、論文集購入者には、論文集をお渡し致します。非会員の連名発表者の参加証・領収証と発表論文集は、責任発表者の方にまとめてお渡しします。

【当日参加の方】

当日参加の方は、「当日参加受付」にお立ち寄りください。当日参加の方は、参加申込票に必要事項をご記入のうえ、大会参加費（下表）を添えて「当日参加受付」にお申し込みください。名札入れ、参加証・領収書をお渡し致します。大会期間中は参加証を名札入れに入れ、常に身につけてください。

大会関係の諸費用（当日納入）について

	会員		非会員	
	大会参加費	一般会員・終身会員	6,000円	一般
	院生会員	3,500円	大学院生	3,500円
	学生会員	2,500円	学部学生	2,500円
学会研修会費		1,000円		1,500円
論文集購入費	個人	6,000円	個人	6,000円
	機関	8,000円	機関	8,000円
懇親会参加費	一般会員・終身会員・同伴者	6,000円	一般・同伴者	6,000円
	院生会員・学生会員	4,000円	大学院生・学部学生	4,000円

【クローク】

クロークは、2号館2階2204教室です。お荷物をお預かりする際に引換券をお渡し致します。引換券をなくされた場合、確認のため身分証の提示をお願いすることがあります。なお、PC等の高価な電子機器類を含む貴重品はお預かりすることはできません。

クローク受付時間：8月24日（土）9：00～18：00、8月25日（日）9：00～17：15

[2] 会員総会

日時：8月24日（土） 11：50～13：15

場所：1号館3階1303教室

重要な議題が予定されておりますので、会員の方はご出席ください。なお、総会では、昼食をご用意しております。

[3] 懇親会

日時：8月24日（土） 18：00～

場所：食堂アゼリア（3号館1階） 日本大学管弦楽団のミニコンサートもごさいます。

[4] 優秀大会発表賞

今大会でも優秀大会発表賞を選考します。選考対象は口頭発表とポスター発表のみで自主企画ワークショップは含まれません。発表論文集原稿、当日の発表、質疑応答などを総合的に判断して、優秀な研究発表をご推薦ください。投票は8月24日（土）と8月25日（日）におこなうことができます。投票用紙は会場に設置してある投票箱に投函してください。発表者（連名発表者を含む）は、ご自身の発表へ投票できませんので、ご注意ください。

[5] 託児サービス

託児サービスの利用を検討している方は、8月7日（水）17時までに大会準備委員会（bus.jaap2019@nihon-u.ac.jp）までご連絡下さい。サービスの詳細につきましては、ホームページ上に公開しております。なお、ご連絡には、できるだけHP上の「連絡フォーム」をご利用くださいますよう、よろしくお願い致します。

申込締切：8月7日（水）17時まで

[6] 障がいのある方へのサポート

本大会では、障がいのある方にもできる限り大会に参加していただけるよう、ノートテイクや車いす利用に伴う介助など各種取組を行います。ご希望のサポート内容とご利用を希望する日時を、8月7日（水）17時までに大会準備委員会（bus.jaap2019@nihon-u.ac.jp）までご連絡ください。サポート内容に応じてスタッフを確保しなければなりませんので、必ず締め切り日までに予約をお願い致します。

申込締切：8月7日（水）17時まで

[7] その他

- (a) 2号館2階2201教室にて、企業展示および書籍販売を行っております。どうぞお立ち寄りください。
- (b) 休憩所は2号館1階中央ラウンジ（コンビニエンスストア（ミニストップ）の向かい側）と2号館2階2205教室になります。お茶とお菓子をご用意しております。
- (c) 館内はすべて禁煙です。ご協力をお願い致します。
- (d) 会場内では、携帯電話はマナーモードにしてください。
- (e) ファックス、宅配便は近隣のコンビニエンスストアをご利用ください。
- (f) 大会期間中は、学内の食堂およびコンビニエンスストアは閉まっています。昼食は、持ち込みいただくか近隣の飲食店をご利用ください。なお、1日目は、総会にご出席いただければご昼食をご用意しております。
- (g) 大会本部は、1号館2階の講師室です。大会中の緊急連絡は、こちらにお願い致します。
- (h) 学内無線LANはご利用になれません。
- (i) 館内呼出はいたしません。

口頭発表者へのご案内

【発表者の方へ】

1. 口頭発表は、2号館2階2202教室にて行います。
2. 口頭発表は、論文集への論文掲載、当日の発表・質疑応答への参加によって、公式発表とみなされます。
3. 連名発表の場合、基本的に発表及び質疑応答は責任発表者が行うものとします。発表時間は1件につき18分です。そのうち、講演が12分、質疑応答が5分です（交替時間1分）。発表中は以下の通り合図致します。
1 鈴：10分経過 2 鈴：12分経過（発表終了） 3 鈴：17分経過（質疑応答終了）
4. 大会委員会でプロジェクタとノートPC（Windows 10、PowerPoint 2016）をご用意します。このPCをご利用の方は、セッション開始15分前までに会場にお越し頂き、発表用ファイルのインストール作業と動作確認をお願い致します。必ず上記の環境で動作するファイルをご用意ください。PCによるスライド発表のみとなります。その他の映像提示装置、学内ネットワークおよびインターネットは使用できません。
5. ご自身のPCを利用される場合も、セッション開始前までに動作確認をお願い致します。会場にはRGBケーブルを用意します。電源アダプタや変換コネクタ等をご用意下さい。
6. 音声接続をご利用の方は、事前に大会委員会へご相談下さい。
7. 発表者自身の責による映写の不具合については、大会委員会は一切責任を負いません。またそれに伴う、発表時間の延長も原則行いません。
8. 資料を配布される方は、各自ご準備の上、セッション開始前に会場スタッフにお渡しください。会場入り口に資料を配置します。なお、会場での印刷はできません。配付資料は必ず事前にご用意ください。

【座長の方へ】

1. ご担当されるセッション開始10分前までに会場へお越し下さい。
2. フロアからの質問や意見を述べられる方には、お名前と所属を明らかにするようにお伝え下さい。
3. 会場係が時間経過をお知らせしますので、発表時間を厳守していただけますようお願い致します。
4. 当日に発表取り消しがあった場合には、発表時間の繰り上げはなさないようお願い致します。

ポスター発表者へのご案内

1. ポスター発表会場は、食堂マロニエ（2号館1階）にて行います。
2. ポスター発表会場内にポスター発表用受付を設けます。セッション開始の10分前までに受付へお越しください。ボードに掲示するための画鋏と責任発表者用のリボンは、その際にお渡しします。
3. ポスター発表は、論文集への論文掲載、当日のポスター掲示、および在席責任時間の質疑応答への参加によって、公式発表とみなされます。
4. ポスターの掲示範囲は、1発表につきポスターは横90cm×縦210cmまでです。この大きさに収まるように作成してください。なお、ポスター上部には発表題目、氏名および所属を明示して下さい。
5. ポスターを掲示するボードには、それぞれに発表番号が付いています。発表者は発表当日の時間までに、持参したポスターをご自分の発表番号の付されたボードに掲示してください。両日ともに13:00から掲示できます。
6. ポスターセッション全体の時間は2時間です。演題番号が奇数の発表者はセッション前半の1時間、偶数発表者はセッション後半の1時間が在席責任時間です。この時間中に係員が出欠の確認に伺います。
7. 在席責任時間が終わっても、セッション終了時刻まではポスターの掲示をしておいてください。ポスターの撤去は、発表者がセッション終了10分後までに行ってください。
8. 本大会の企画として「教育発表」を設けています。本学のゼミナール学生が発表を行います。

ワークショップ発表者・企画者へのご案内

【発表者の方】

1. ワークショップは、2号館2階2203教室、2号館3階2301教室・2302教室で行います。
2. 大会委員会でプロジェクタとノートPC（Windows 10、PowerPoint 2016）をご用意します。このPCをご利用の方は、セッション開始15分前までに会場にお越しいただき、発表用ファイルのインストール作業と動作確認をお願い致します。必ず上記の環境で動作するファイルをご用意ください。PCによるスライド発表のみとなります。その他の映像提示装置、学内ネットワークおよびインターネットは使用できません。
3. ご自身のPCを利用される場合も、セッション開始前までに動作確認をお願い致します。会場にはRGBケーブルをご用意します。電源アダプタや変換コネクタ等をご用意下さい。
4. 音声接続をご利用の方は、事前に大会委員会へご相談下さい。
5. 資料を配布される方は、各自ご準備の上、セッション開始前に会場のスタッフにお渡しください。会場入口に資料を配置します。なお、会場での印刷はできません。配布資料は必ず事前にご用意ください。
6. ワークショップ1件の時間は90分です。

【企画者の方へ】

1. ワークショップ開始10分前までに会場へお越しください。
2. フロアから質問や意見を述べられる方には、お名前とご所属を明らかにするようお伝えください。
3. 終了時間厳守をお願いします。

大会についてのお問い合わせと連絡先

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 518 司ビル 3F IBI 内

日本応用心理学会大会受付事務局

TEL: 03-5273-0473 FAX: 03-3203-5964 E-Mail: j-aap@ibi-japan.co.jp

URL: <http://congress.j-aap.jp/2019/index.html>

直接準備委員会にお問い合わせの際は、bus.jaap2019@nihon-u.ac.jp へお願い致します。

また大会期間中、緊急のご連絡がございましたら 090-1999-1602 までご連絡ください。

理事・監事の皆さまへ

以下の通り、理事会を開催致します。理事、監事の皆さまはご参集のほどよろしくお願い申し上げます。

理事会

日時：8月23日（金）15：00～

場所：本館 31 会議室

また常任理事会は以下の通り開催致します。常任理事の皆さまはご参集のほどよろしくお願い申し上げます。

常任理事会

日時：8月25日（日）11：50～

場所：本館 34-35 会議室

タイムテーブル

8月24日(土) 第1日目				8月25日(日) 第2日目					
9:00 受付開始				9:00 受付開始					
10:00	口頭発表 ① 【教育・人 格・福祉・ その他】 2202教室	自主企画 WS① 【応用心理 学における 「労働」研 究のこれま でとこれか ら】 2203教室	自主企画 WS② 【ストレス チェック法 制化以降の 産業精神保 健～心理職 の立場から 考える職 場・勤労者 支援～】 2301教室	自主企画 WS③ 【カウンセ リング、心 理療法への アジアから の発信 (3): 禅, 森林散 策カウンセ リング, 心 身互動療法 の視点か ら】 2302教室	10:00	口頭発表 ② 【犯罪・社 会・産業・ 災害】 2202教室	自主企画 WS④ 【喪失の悲 しみを越え て～マイク ロカウンセ リングから のアプロ チ】 2203教室	自主企画 WS⑤ 【地域性 (県民性) を明らかに する～2か 所以上の地 域で暮らし た場合の地 域差につい て～】 2301教室	自主企画 WS⑥ 【心理学に おける実践 ～現場研究 の発信とそ の課題～】 2302教室
11:20				11:30					
11:30				11:40					
11:50	総会 〔1303教室〕 ※ご昼食をご用意いたします。			11:50	昼休み		常任理事会 〔本館会議室〕		
13:15				13:00	特別講演 〔1303教室〕 【アニメに見る「感情の谷」】				
13:30	大会シンポジウム 〔1303教室〕 【グローバル人材の育成～大学での留学制度の活用からグローバル・コンピテンシーへの発展～】			14:30					
15:30				14:45	研修会B 〔2203教室〕 【PAC分析の理論と実 施技法】				
15:45	ポスター① 〔食堂マロニエ (2号館1階)〕		研修会A 〔2203教室〕 【インターネット上の 言説の分析 偏見・差別研究を題材に】	15:45	ポスター② 〔食堂マロニエ (2号館1階)〕				
16:45				16:45					
17:45									
18:00	懇親会 〔食堂アゼリア (3号館1階)〕								
20:15	※日本大学管弦楽団によるミニコンサートがあります。								

『グローバル人材の育成－大学での留学制度の活用からグローバル・コンピテンシーへの発展－』

企画者 日本応用心理学会第86回大会委員会
司会者 外島 裕 (日本大学商学部)
話題提供者 眞谷国光 (早稲田大学総長室/国際部)
橋上愛子 (東京海上日動メディカルサービス株式会社)
Bryan Sherman (Gramercy Engagement Group, Inc.)
指定討論者 井上孝代 (明治学院大学)
白木三秀 (早稲田大学政治経済学術院)

《企画趣旨》

国際化がきわめて速い速度で進展し、多文化共生の社会のなかでの適切な行動が課題となっています。特に将来このような、いわゆるグローバル社会において活躍が期待される大学生の育成支援については、各大学では留学制度の充実と活用が図られています。大学生自身も、留学の機会を自己の成長の機会として積極的に活かそうとしています。この留学経験を意義のある体験の機会とするためには、多くの支援の工夫が必要です。さらに、大学から社会での活躍につながっていくためには、グローバル経営における人材に必要な能力要件・行動要件を理解しておく必要があります。従来からの仕事への適性や能力開発の視点にとどまらず、たとえばグローバル・リーダーシップへの成長が必要となるでしょう。本シンポジウムでは、大学での留学制度のありかた、大学生の留学を支援する自己理解のレディネステストとフォロー、そして国際人事における人材の必要要件などを話題として、参加の諸先生とともに話し合いを深めたいと企画しています。

《話題提供》

『近年の大学における留学の動向および留学による学生の変容～早稲田大学の事例より～』

眞谷国光

(早稲田大学総長室/国際部)

(話題提供の要旨)

昨今、日本において国際性を備えた人材の育成が喫緊の課題となっている。文部科学省補助金事業においても、「大学の世界展開力強化事業」(2011年度開始)「経済社会の発展をけん引するグローバル人材育成支援」(2012年度開始)「スーパーグローバル大学創成支援」(2014年度開始)など大型の補助金支援策が矢継ぎ早に実施される等、国策としても、「グローバル人材」の育成が急務であることが理解される。これらの追い風により、近年日本全体で海外留学者数が大きく増加する結果をもたらした。

この動向により、海外留学の量的な拡大とともに、その質的な変化がもたらされた。すなわち、これまで主流であった学位取得型留学から、1年間や半年間の交換留学、そして夏休みなどを利用した短期留学等比較的短くより参加しやすい留学が増加したという特徴を指摘できる。こうした背景により、近年の傾向としては海外に不慣れな学生も、数多く留学に行く傾向が強くなってきている。

そこで重要なのは、単に海外に数多く学生を送り出すだけでなく、きちんとその学習成果を把握して評

働し、また心身ともに健康な留学生を送れるような学生支援策である。これらに対して、大学はどのような具体的な方策を採ることができるだろうか。

早稲田大学では、海外留学の教育的アセスメントを行うため、留学効果測定という教育学の観点から構築された調査を実施している。また、海外留学に対しての個人のメンタルヘルスを促すための SRSA (Scale of Readiness for Study Abroad) という臨床心理学の観点から開発された調査をあわせて実施している。これらの実施により、海外留学の質的評価・対応を行っている。

当発表は、これら両調査の具体的な実施概要を共有する。留学効果測定に関しては、実際のデータから見てくる海外留学の効果に関する分析結果を一部ご紹介する。また、SRSA に関しては、実際にこの検査により学生および運営側の教職員に対してもたらされる効果についてご紹介する。

≪話題提供≫

『大学のグローバル化を支える留学のリスク管理と留学の成果—「留学生メンタルヘルス支援プログラム」から「グローバルキャリア開発プログラム」への展望—』

橋上愛子 (臨床心理士・公認心理師)

(東京海上日動メディカルサービス株式会社健康プロモーション事業部 EAP 室)

(話題提供の趣旨)

日本におけるグローバル戦略 (GGJ,SGU 等) は近年加速傾向にあり、日本の高等教育の国際化は著しい。日本学生支援機構の調査によれば、2017 年 5 月現在の留学生数は 26 万 7042 人となり、前年比で約 2 万 8000 人の増加数が報告されるなど国の期待通りの実績は挙げられてきているが、一方で派遣留学生のメンタル不調問題も顕在化しつつある。学校側としては、事例化した学生の事後対応に留まらず、留学前の危機管理や心理教育 (ストレスマネジメント等) を行うなどのサポート体制作りが急務である。

弊社が早稲田大学と共同で開発した留学準備教育スケール (Scale of Readiness for Study Abroad,以下「SRSA」) は、学生が留学前に自分の性格傾向 (強み・課題) や留学適応力を把握し、渡航前の心構えと現地での不適応を未然に防ぐことを目的としたセルフケアツールである。早稲田大学では、2017 年度より本格運用を始めており、留学に行く学生に対して留学の前後に受検するよう促している。

一方、学校側は、学生の留学適応力をもとに留学先の事前検討や気がかりな学生に対して事前に個人面談等の対策を打つことによって、学生に対する安全配慮義務を遵守し、学内のリスク管理に繋がれるという特長がある。最近では文科省から「日本人の海外留学の効果測定」等、留学成果の可視化を求められており、学校側は留学プログラムの PDCA サイクルを適切に回し、社会でグローバルに活躍できる学生の輩出に益々寄与していくべき局面を迎えている。

学生は、留学という挑戦を経て、語学力の向上といった教育的側面の成長が期待できると共に、様々な経験を通して人間的に大きく成長できる貴重な体験をも得る。その経験を自身の「強み」として可視化し、次に続く就職活動に活かすために、学校側や企業は、留学後の定期的なフォローアップ介入を行い、留学で身につけたグローバルスキル (コンピテンシー) を維持させるプログラムの開発が必要ではないだろうか。本発表では、学校側のサポート体制 (『留学生メンタルヘルス支援プログラム』) の現状と、企業における『グローバルリーダー育成』を見据えた、学生の『グローバルキャリア開発プログラム』の展望についても考察したい。

≪話題提供≫

『グローバル経営時代の人材に必要な要件、育成について』

Bryan Sherman (ブライアン・シャーマン)

(グラマシー エンゲージメント グループ株式会社 代表取締役)

(話題提供の要旨)

グローバリゼーション、デジタル化、刻々と進む人口減少。人生 100 年時代の到来、長く続いた終身雇用制度の終焉。仕事を取り巻く環境は急速に変化し混沌としている。その変化に適応できる者とできない者との間には深い溝ができつつあり、働くすべての人々に希望よりも不安をもたらしている。そんな中、ただひとつ断言できることは、どんなにテクノロジーが進んだ時代であっても、人間は機械や A.I.に屈せず、仕事とは本来我々の健全な精神と肉体の源となるべきであるということ思い出さなくてはならない。そして、グローバル時代を支えるトップ人材は次の三つの特徴を体現するために育成されるべきである。

1. 生涯学習への意欲や物事に好奇心を持ち続けること。
2. 自己満足を避け、常に挑戦すること。
3. 密接で有意義な対人関係を維持すること。

上記に述べた特性と日本におけるグローバル社員育成の現状について解説、また学生時代の教育と仕事を通じ培われる経験が社員のグローバル育成にどのような手助けをするかについて提言する予定である。

Globalization. Digitalization. Radical decrease in Japan's population. 100 year life and the end of implied lifetime employment in Japan. The world of work is changing fast.

But one thing is clear: to retain our mental agility and vitality, our work should be the source of invigoration and inspiration. Therefore, business should support the needs of humanity (rather than humanity succumbing to the whims of the business machine's drive for productivity and efficiency from automation.). In a global era, top employees should be nurtured to embody the following characteristics: (1) to remain curious with a life-long learner's mind, (2) to avoid complacency and take on challenges, and (3) to retain close and meaningful interpersonal relations.

In this talk, Sherman will review the necessity for these characteristics, provide an assessment of the current state of affairs in Japan particularly and provide some suggestions for how academic education and practical work life experience should nurture the development of employees.

≪指定討論≫

『自分らしくキャリアをデザインすることー「文化の懸け橋」と「幸福な生き方」』

井上孝代

(明治学院大学)

(指定討論の要旨)

「留学」の目的自体が大きく変化してきた今日、改めてグローバル人材の育成にとって留学の意義の論議は喫緊の課題であろう。本シンポジウムにおいて、(1) 留学制度の多様なあり方に対応した学生支援対策と評価 (眞谷報告)、(2) 留学生の特性やグローバル化に即した支援内容の予防的・教育的可能性と展望 (橋上報告)、(3) 留学を卒業後の職業人としてのキャリア発達にどうつなげるか(Sherman 報告)の話題提供から

は、若い時代の留学という最大の異文化体験が自己理解・自己肯定感を得るチャンスとして活かされ、生涯のキャリア発達の起点ともなりうることを、そしてその後のグローバル社会での有用な人材として育ちうるという一貫した強いメッセージが伝わってくる。すなわち留学制度の活用と「グローバル人材」の育成、ひいてはグローバル・コンピテンシーの発展との強い結びつきが主張されている。

指定討論では、上記のメッセージに大いに共感しつつ、この「人材」という言葉に目を向けたい。「人材」とは「才能のある、役に立つ人」とい意味である。「役に立つ」とは何に対して役にたつのか。「経営に役に立つ」といった側面だけでなく、「本人にとっても役に立つ」という視点、つまり留学生の生涯キャリア発達の支援という観点の重要性を指摘したい。この場合の「キャリア」は「職業」だけでなく、「ライフキャリア」「ライフコース（人生）」を意味する。グローバルな時代はさまざまな価値が多様化する多元的社会である。そういう時代にこそ、「いかに自分らしくキャリアをデザインできるか」が問われよう。留学制度がそのような個人の生涯キャリア発達の視点で活用されること、そしてそのことが願わくば「文化の架け橋」ともなるような社会的役割をもち、社会貢献のできる人材の育成につながることも期待したい。それがポジティブ心理学で言われる「幸福な生き方」の要件をも満たすものと考えからである。

≪指定討論≫

『「グローバル人材」や「グローバル・コンピテンシー」とは何か』

白木三秀

(早稲田大学政治経済学術院)

(指定討論の要旨)

「グローバル人材」や「グローバル・コンピテンシー」とは何かについては諸説あり、これまでも様々なリサーチも報告されている。本シンポジウムの特徴は中でも特に、大学での留学とグローバル・コンピテンシーとの関連に的を絞り、議論を行っているところにある。

グローバル・コンピテンシーは価値観や性格のような static な要素と後天的な dynamic な要素から成っていると考えられるが、留学は基本的に後者に影響を与えるが、若い人の場合には前者にも大きく影響するものと考えられる。

このため、我々の日本人海外派遣者のデータで見ても、若い頃の海外経験がシニア・マネジャーになってからのパフォーマンスに大きな影響を与えることが示唆されている。また、留学による広い視点の必要性の認識・体験は、様々な知的関心を引き出す大きな刺激になり、態度変容と伴うことにより、後ほどの人生を豊かにするばかりでなく、キャリアに大きな効果を持つものと考えられる。

若い人材の海外でのパフォーマンスを規定する要因について考察すると、留学が語学習得という dynamic コンピテンシーの獲得を超えて、態度変容を通じて、後ほどの海外での活躍に大きな力になることを確認したい。

【シンポジスト紹介】

話題提供者：眞谷 国光（まみや くにみつ）。

早稲田大学総長室調査役兼国際部調査役。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程在籍中。早稲田大学留学センター、国際部国際課等を経験。専門領域は、比較国際教育学。眞谷国光「日本人学生のアジ

ア留学経験によるアジア・シティズンシップ育成に関する考察』『高等教育研究』日本高等教育学会 2019年5月 第22号 他。

話題提供者：橋上 愛子（はしがみ あいこ）

聖心女子大学文学部卒業後、民間企業在職中に東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻修了。国立精神・神経医療センター精神保健研究所にて研究生、都内スクールカウンセラーを経て現職。専門領域は留学生支援、産業心理学。橋上愛子、井上孝代、外島裕、他。“大学生向け留学準備教育スケールの開発の試みⅡ—新柔軟性尺度の作成—”。日本応用心理学会大会発表論文集 83 巻。北海道, 2016-09-01/02. 日本応用心理学会, pp. 54-54.他。

話題提供者：Bryan Sherman（ブライアン・シャーマン）

代表取締役。グラマシー エンゲージメント グループ株式会社（Gramercy Engagement Group, Inc.）。米国ニューヨーク市にて日系企業（NY・LA）を対象に人事コンサルタントとして従事。その後米国住商情報システム人事総務部長として在米日系企業が抱える人事の現場を内と外の視点で支える。来日後株式会社ファーストリテイリングでのグローバル人事業務に参画。2010年グラマシーエンゲージメントグループ株式会社設立。日本企業の人事のグローバル化をサポートするコンサルタントとして活躍中。米国ニューヨーク州出身、米国 Williams College 卒。早稲田大学トランスナショナル HRM 研究所 招聘研究員。

指定討論者：井上 孝代（いのうえ たかよ）

明治学院大学名誉教授。九州大学大学院文学研究科博士課程心理学専攻単位満期退学。博士（教育心理学）。東京外国語大学留学生日本語教育センター教授を経て、1998年より明治学院大学心理学部教授。元明治学院大学副学長。日本応用心理学会名誉会員。

専門領域はカウンセリング心理学。マクロ・カウンセリングを提唱。『コンフリクト解決のカウンセリング—マクロ・カウンセリングの立場から—』（編著、2012、風間書房）、『エンパワーメントのカウンセリング 共生的社会支援の基礎』（編著、2007、川島書店）他。

指定討論者：白木 三秀（しらき みつひで）

早稲田大学 政治経済学術院教授。早稲田大学政治経済学部卒業、同大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。国土舘大学政経学部助教授・教授等を経て、1999年より現職。専門は労働政策、国際人的資源管理。現在、早稲田大学トランスナショナル HRM 研究所所長、国際ビジネス研究学会会長、日本労務学会理事(元会長)を兼任。

最近の主な著作に『国際人的資源管理の比較分析』（単著、有斐閣、2006年）、『グローバル・マネジャーの育成と評価』（編著、早稲田大学出版部、2014年）、『人的資源管理の力』（編著、文眞堂、2018年）等がある。

司会：外島 裕（としまゆたか）。

日本大学商学部経営学科・大学院商学研究科経営学専攻教授。日本大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了。日本化薬(株)、(株)日本能率協会マネジメントセンター勤務を経て、1997年より現職。日本応用心理学会常任理事。日本応用心理学会第86回大会委員長。

専門領域は産業・組織心理学。外島裕監修（2019）『産業・組織心理学エッセンシャルズ（第4版）』ナカニシヤ出版。外島裕（2019）「行動開発における自己覚知の深化の過程に関する研究」『商学集志』88（4）,pp.179-220. 他。

アニメに見る「感情の谷」

○横田正夫

(日本大学文理学部心理学科)

キーワード：アニメ・「感情の谷」・悟り

1. 日本のアニメ

日本のアニメは世界に広く知られ、多くのファンを獲得している。最近では、「進撃の巨人」がその一つである。そのヒットの理由には、青年期を描いていること、物語の複雑であること、特異な世界観が描かれること、キャラクターが魅力的であることなど、いろいろと考えることができる。その中の一つの大きな特徴にここを描くということがある。悩む主人公、激しく感情を揺さぶられる主人公は、日本の観客には馴染みのものである。特に、主人公が激情の果てに無意識世界に落ち込み、そこでの出会いによって悟りを得て、ヒーローになってゆくといったパターンが好んで描かれる。このパターンを「感情の谷」として概念化した(横田、2017)。

2. 「感情の谷」

「感情の谷」では主人公が危機に遭遇し、ここらの奥底に閉じこもる。その危機は生半可なものではない。上記の「進撃の巨人」では、主人公は、戦いを挑んだ巨人に捕食され、胃の中で、絶叫する。ここには死を目の前にした激情がある。そしてこの激情が、主人公を巨人に変身させる。巨人は他の巨人を倒すことのみを目的として、無意識的に行動する。その無意識のさらに底では主人公は死んだはずの母親と平和に暮らしている、と実感している。「感情の谷」の無意識の底には、平安な隠れ家があった。主人公はそこからでる必要性を持たない。その安住の場から出るためには、外からの友達の呼びかけが必要で、それが主人公の望んでいたことを思い出させる。主人公の本来の願いを悟らせる。こうして巨人に変身し倒れていた主人公が復活する。こうした「感情の谷」への落ち込みとそこからの回復は、日本のアニメの歴史を振り返ると繰り返し描かれてきていた。

そのはじめは高畑勲監督の「太陽の王子 ホルスの大冒険」である。主人公ホルスは、悪魔に娘として育てられ、手先として村に送られてきた美しいヒルダの策謀によって迷いの森に突き落とされる。もともとホルスは、ヒルダが一人ぼっちで廃村にいたところを、彼の村に連れ帰ったのであり、ホルスが孤児であることもあって好意を寄せていた。その彼女が村を混乱に陥れ、村からホルスを追放し、その果てに彼を迷いの森に突き落とす。ヒルダは、迷い森に突き落とす直前に、自らの口から、その顛末を知らせる。しかしそれでもなおホルスはヒルダの人間の心を信じていると彼女に伝える。迷いの森に落とされたホルスは、森の中でヒルダの姿を幻視する。幻視をみるほど、ホルスはヒルダによって激情状態に陥れられ、「感情の谷」に落ち込んでいた。さまざまな幻覚をホルスは見るが、その中のひとつは一人のヒルダがたくさん分かれてゆくというものであった。これを目にしたホルスは、悟りを得る。つまりばらばらな村人たちのところをひとつにまとめることができるならば、その力は悪魔をも凌ぐものになるというものである。この悟りを得たたん、誰も脱出できないとされた迷いの森からホルスは脱出できた。迷いの森は、彼が「感情の谷」に落ちこんだことの象徴であり、その谷底でヒルダに新たに出会い、その出会いによって悟りを得、そしてヒーローとして現実世界に戻って

きたとパターン化できる。

こうした「感情の谷」は、その後「幻魔大戦」や「パーフェクトブルー」、最近の「君の名は。」、「この世界の片隅に」にいたるまで応用されてきた。このアニメの「感情の谷」に対応するような体験は現実世界にも見いだせる(横田、2017)

3. 「感情の谷」の心理学

「感情の谷」に相当するものは、統合失調症の発病過程に見ることができる。その発病初期には世界没落体験として知られる世界が不気味に変容し、破滅的な出来事が起こりそうな不穏なものに変化する。その後、不穏なものが、患者本人にとって独特な意味を帯び、世界のすべてのものが何やら暗示しているようで、重大な意味を秘めている確信が生まれる。こうして妄想が芽生え、すべての出来事が自分を陥れようと仕組まれ、どこにも逃げ場がないと恐怖に陥る。こうした発病過程では、緊張困惑気分というような不安でいてもたってもいられないような感情に見舞われる。そして「感情の谷」に落ち込むアニメの世界のように妄想世界に入り込んでゆく。しかし統合失調症の発病過程とアニメの「感情の谷」の両者で相違していることは、患者では妄想世界から悟りを得て現実に戻るということが困難ということである。

別の例では臨死体験として知られるものがある。瀕死の重傷を負った人の中には、臨死体験を報告するものがある。例えば、分析心理学のユング(ヤッフェ、1973)は1944年の初めに心筋梗塞を患い、危篤状態に陥った。その際、さまざまなビジョンを見た。彼は地球外にあるように感じ、眼下に地球を望んだ。そして地球から遠ざかっていると感じた。しばらく地球を見てから向きを変えたところ真っ黒な石塊が見えた。ユングの家と同じかそれより少し大きめのサイズだった。その入り口に近づいたとき、すべての経験が走馬灯のようにユングから消え去り、離脱した。ユングは、「私は存在したものの、成し遂げたものの束である」と悟った。こうした時、下の方から一つのイメージが浮かび上がってきた。主治医のものであった。ユングは地球を離れる権利はなく、引き返さなければならぬと彼からメッセージが送られてきた。そして主治医の幻像は消えた。このように臨死体験のなかでユングは悟りを得たのであった。

4. まとめ

日本のアニメの一つの特色は、「感情の谷」を描くことで、統合失調症患者の体験するようなところの混乱や臨死体験を娯楽として提供する。主人公たちは、激情の果ての「感情の谷」の底で、自身の心を高めるような悟りを得る。視聴者はアニメを通して自身の心を高める悟り体験を疑似的に得る。ここに日本のアニメが好まれるひとつの理由があると思われる。

引用文献

横田正夫(2017)大ヒットアニメで語る心理学、新曜社
ヤッフェ、A(編)(1973)ユング自伝2、みすず書房

(よこたまさお)

応用心理学における「労働」研究のこれまでとこれから

企画者 大橋信夫（日本応用心理学会名誉会員）、藤田主一（日本体育大学）
 司会者 藤田主一（日本体育大学）
 話題提供者 越河六郎（公益財団法人 大原記念労働科学研究所）
 話題提供者 尾入正哲（中京大学）
 指定討論者 角山 剛（東京未来大学）
 キーワード：労働科学、研究方法、応用心理学

【企画趣旨】

応用心理学における「労働」研究は、産業領域に限った問題ではなく、交通や犯罪、臨床や教育などのあらゆる分野を網羅するものである。それは、本学会の前身である研究会が特に関西の地から誕生し、その後東京の研究者と合流して今日に至った経緯を振り返ると理解できる。

このワークショップでは、「労働」研究の方法論や実践論などについて、「これまで」と「これから」という観点からいくつかの問題点を中心に話題提供する。それを受けて、広く産業分野からの指定討論と幅広い議論を展開する。

【話題提供】

◆応用心理学におけるこれまでの「労働」研究

越河六郎（公益財団法人 大原労働科学研究所）

応用心理学は、実際生活や現実の問題を心理学的観点から研究を目指す心理学の一分野である。（広辞苑）。たとえば、産業心理学は産業場面で生起している問題を心理学の方法や結果を単に応用して研究するだけではなく、独自の方法論の展開が求められている。

「労働」研究は広範な問題領域を含んでいる。経済学、社会学、経営学、医学（生理学）など各専門分野からそれぞれの目的に沿って研究がなされている。

わが国では、労働・生活行動を直接的に研究する組織として労働科学研究所が設立された（1920年、倉敷紡績・大原孫三郎）。「労働科学」とは、人間の労働を規定している諸要件を研究する学問。主に生理・心理・衛生などの見地から追究する（広辞苑）、むしろ総合的な研究組織である。この心理学の分野を展開し産業心理学を体系化した桐原葆見の考え方、労働研究の一端を概観する。

労働科学は「真に合理的な労働と生活の条件を求めてやまない」という視点からなされている研究活動である。何らかの思想に偏したり、時代の主潮に流されることなく、常に学問的なレベルを目指しての研究である。そして、もうひとつ大事なことは、研究の方向性である。桐原は働く人間にとって、その労働・環境条件が如何にあるべきかを尊重し、効率よく働かせるためにはどうすればよいかという構えとは一線を画している。

労働研究の方法は労働場面の直接的な観察が基本である。労働科学研究では、労働生活の体験がないと無理だという側面がある。直接的観察法（質問法等も含む）は「現場主義」と称せられるが、「現場」とは問題事象の所在を意味する。

「労働」研究の具体例を若干上げておく。①労働時間関連の研究：三交代制の導入。労働時間の長さや勤務間隔時間との関連（労働と休養のバランス）。②親の職業階層と子どもの心身発達に関する研究：精神発達の逐年的研究。③労働能力に関する研究：各種適性検査の開発。④産業安全に関する研究：「不注意物語」（狩野広之）。⑤技術革新に伴う職務特性の変化に関する研究：作業方式と心身健康管理の問題。

◆労働科学の「これから」 尾入正哲（中京大学）

労働科学とは何だろうか？おそらく労働者・作業員目線か

らの職場に関する研究ということになる。労働組合や労働者福祉という意味だけではない。しかし、言うは易くで「目線」といっても、それは具体的にいったい何なのだろうか。

質問紙の集計結果、インタビューの聴取内容、組織の制度やルール等の文書上の検討…これらは目に見える研究データである。しかし、労働科学の目線はそれにとどまらず、もう一段踏み込んだものであってほしい。労働負担といえば、身体的なもので生理的な方法で測定可能であるし、心理的なものであれば、ストレスのチェックリストは数多くある。こうしたデータは統計的に処理されて結果が学会などで発表される。

しかし、もしかすると、そうしたデータに表われない暗黙の負担要素が作業員の内面にはあるかもしれない。それを探ることが「作業員目線」ということではないかと考える。例えば、多くの事業所で「ゼロ災何日連続中！」といったスローガンが掲げられている。それ自体安全活動として意味はあるが、作業員側からすると、もし自分が事故を起こして記録をストップしては…というプレッシャーとして感じられているのではないか。また、事故の後で何時間にも及ぶ反省会を行っている例を見たが、作業員側からみれば長時間に及ぶ反省会は罰としてしか受け止められていないようである。そのため、事故を起こしてケガをした本人が自ら傷を隠してそのまま帰宅しようとした事例に接したことがある。

管理者側が暗黙のプレッシャーを与えているだけでなく、作業員側が自ら暗黙のルールを作り出している状況もありうる。誰でも早く仕事を終わらせて、さっさと帰りたい。それが安全手順の無視や勝手な手順変更につながっていく。どれも管理者や作業員の内面に潜むもので、表面には出てこない。とはいうものの、こうした内面への洞察は別に作業員の深層心理を読む、といった大げさなものでないと思う。

具体的な仕事の内容・作業員の個人特性（年齢・性格…）・設備や作業環境の状況などを幅広く見渡せば、自らポイントが浮かび上がってくるように思われる、トートロジーのように思えるが、それができることが労働科学的視点あるいはセンスではないだろうか。「これから」という観点からは、そういったセンスを持つ人材、分析的でなく作業員の全体像をとらえることのできる人材を育てることが労働科学の重要な任務のように思われる。

【指定討論】 角山 剛（東京未来大学）

産業心理学が組織に働く人間の行動に注目し、組織行動を一方の軸とする産業・組織心理学として研究の裾野を広げてから半世紀が過ぎた。この間さまざまな領域にわたり多くの成果を蓄積してきたが、近年組織を取り巻く環境は大きく変化してきており、組織に働く人々の行動にさまざまな影響をもたらしている。我が国が抱える若年人口の減少、高齢化問題も、今後の組織のあり方や働き方に大きな影響を及ぼすだろう。組織を取り巻く変化の中で「労働」をどのような視点で捉えていくか、労働科学を牽引してこられたお二人の先生にじっくりお話をうかがってみたい。

（おおはしのぶお、ふじたしゅいち、こすごうろくろう、おいらまさあき、かくやまたかし）

ストレスチェック法制化以降の産業精神保健

～心理職の立場から考える職場・勤労者支援～

○企画者：村上裕子¹ 井上孝代² ○司会者：井上孝代

○話題提供者：大林裕司³ 高見澤由紀⁴ 村上裕子

(¹東京海上日動メディカルサービス株式会社 ²井上孝代マクロカウンセリングセンター

³一般社団法人心理支援ネットワーク心 PLUS ⁴産業能率大学)

キーワード：ストレスチェック、職場環境改善、マネジメント

【本自主企画ワークショップ実施の背景と目的】

2015年(H27)の労働安全衛生法一部改正に伴い、ストレスチェック制度(厚生労働省,2015)が施行され、従業員50人以上の事業所にストレスチェック実施とその後の対応が義務付けられてから4年目を迎えた。産業医や産業保健スタッフを中心に社内でストレスチェック実施体制を組み立てた企業、社外のEAP事業者やストレスチェック業者に委託する形で体制構築を行った企業など様々ではあるが、実施が義務づけられた規模の企業では、8割を超える事業場でストレスチェックが実施されている(厚生労働省,2017a)。

このように、大規模な企業においてはストレスチェックの実施そのものは概ね定着しており、現在はそれ以降の対応、すなわち従業員個人々のセルフケア促進や組織としての職場環境改善の活動に焦点が当たりつつある。特に職場環境改善活動については、現時点では企業側の努力義務ではあるものの、第13次労働災害防止計画(2018年度～2022年度;厚生労働省,2017b)において組織による職場改善活動実施率の数値目標の設定(ストレスチェック結果を集団分析し、その結果を活用した事業場の割合60%以上とする)がなされるなど、一つの大きなテーマとなっている。

そこで今回は、産業分野で実際に活動している心理士より、ストレスチェック後の産業精神保健活動の実践例を紹介しつつ、心理士としての関わりをどう職場のこころの健康づくりに活かせるかを共に考える場としたい。

【方法】

本ワークショップはシンポジウム形式で実施する。

まず、村上より前段として、法制化されたストレスチェック制度の概要、ならびに厚労省より報告されている実施状況の調査結果を概説する。その上で、実際のストレスチェック結果を活用してのさまざまな対策例(セルフケア・ラインケア等の研修、高ストレス者への心理士面談実施、選定された高ストレス部署への個人面談と人事職制へのフィードバック、高ストレス部署内でのグループセッション実施と組織状況のアセスメント等)を紹介する。職場改善活動は職場が主体となって行うものであるが、社内外のバックアップがあることで、より機能させやすくなる。活動においては職場のメンバー、マネジャー、人事や経営層、それぞれの取り組みが必要となるが、実践の中から見えてくることとして、職場のマネジャー層の適切なマネジメントや積極的な取り組みの重要性が挙げられる。鍵となるマネジャーへのエンパワメントの必要性など、実践活動の結果から見えてきた課題や留意点を報告する。

次いで、大林氏からは、「心理学にできるストレスチェックの活かし方」と題して、ストレスチェックの課題とその解

決に向けて「コミュニティ心理学」「行動心理学(応用行動分析学・行動修正)」を基礎としたコンサルテーション技法の紹介とともに、職場への介入の実例を挙げる。それを題材に、問題解決の取り組みの実行に向けて、①介入の厳密性を重視した徹底的な環境調整(人と環境との相互作用)と、②その取り組みを推進するために社内には生じる変化への抵抗感などを低減する工夫といった観点から、心理学がどのようにして職場のこころの健康に貢献できるのかを考察する。

更に、高見澤氏からは「ストレスチェックをマネジメントに活かす」というテーマで、職場環境の大きな鍵となるマネジメントについての各種理論や、マネジメントに活かせるアセスメントツールを紹介する。

実際にマネジメントと聞くと、多くの職場ではコミュニケーションと業務の改善を手の打ちどころとして想像することが多い。その一手は、より組織の現状に合致し、その組織の強みが発揮される有効な一手であることが望ましい。そのためにはマネジメントの大きな原則と、現状把握に参考になる視点が必要である。今回はアセスメント項目を交えてこれらについて話題提供したい。

働き方改革や健康経営が社会の注目を浴びる中、人手不足やハラスメント等、職場の様々な問題も浮かび上がってくる現在、働く場や働く人を支援することは、心理職の大きなフィールドになりつつある。今回は、実際の産業臨床の現場からの報告にボリュームを置きつつ、日々、産業臨床の実践に関わる方々、産業精神保健の研究者、これらに興味をお持ちの方々等、フロアの皆様とのディスカッションを通して、研究と実践の架橋を試みたい。

【引用文献】

厚生労働省 2015 心理的な負担の程度を把握するための検査及び面接指導の実施並びに面接指導結果に基づき事業者が講ずべき措置に関する指針。

(<https://www.mhlw.go.jp/hourei/doc/kouji/K151130K0040.pdf>)

厚生労働省 2017a ストレスチェック制度の実施状況。

(<https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11303000-Roudoukijunkyokuanzeneiseibu-Roudouiseika/0000172336.pdf>)

厚生労働省 2017b 第13次労働災害防止計画。

(<https://www.mhlw.go.jp/content/11200000/000341158.pdf>)

(むらかみ ゆうこ・いのうえ たかよ・おおばやし ゆうじ・たかみざわ ゆき)

カウンセリング，心理療法へのアジアからの発信（3）

： 禅，森林散策カウンセリング，心身互動療法の視点から

司会：林 潔¹ 高橋浩子² 話題提供者：加藤博己³ 小室央允³ 竹内啓恵⁴ 李 同帰⁵ 指定討論者：長澤里絵⁶ 高橋良博³
 (1 白梅学園短期大学 2 山手教育研究所 3 駒澤大学 4 東京大学 5 北京大学 6 立正大学)

キーワード：禅 森林散策カウンセリング 心身互動療法

【趣旨】 カウンセリングの起源は日常の相談である。記録に留められた例としては、史記の五帝本紀第一に、堯は四嶽に施政の相談をしたとある。また共に歴史に残る名臣を持ちながらも、助言の採否で明暗を分けたのが越の勾踐と呉の夫差である(越王勾踐世家第十一・上)。また日本書紀卷十一に、応仁天皇崩御の際、太子は後の仁徳天皇と後継帝位について相談する。そして、相談からカウンセリングへと転機をもたらしたものは、Guidance 運動、Howthorn 研究、Rogers の活動である(沢田,1984)。治すということにかかわる心理療法は、原始神秘主義、宗教にその起源を求められよう。桂(1989)は東洋のストレスケアとして、漢方医療(方剂)、絶食療法、内観法、森田療法、禅療法、ヨーガ、気功療法などをあげている。東洋のアプローチについては、多くの報告がなされている(例：春木,他,1993)。

本ワークショップでは、昨年に引き続き禅の役割について報告する。動物、植物も気づきを促進し、その人の存在を支える対象である。わが国独自の発展として森林カウンセリングの例が報告される。また中国の心身互動療法を紹介する。(司会：はやし きよし・たかはし ひろこ)

加藤博己 禅とマインドフルネス：2つの瞑想法の発生・語源からの比較

一昨年は、文化的要因の大きいマインドフルネスを用いた心理療法や、米国大手 IT 企業を中心としたマインドフルネスの社会的ブーム、そして東洋思想の影響を受けた心理療法・カウンセリングを紹介した。昨年は、「禅」と「マインドフルネス」への心理学的研究と臨床的適用、そして注意集中型瞑想と、洞察型瞑想、すなわち、止観を併修する観点から「禅」と「マインドフルネス」を比較した。今回は「禅」瞑想と「マインドフルネス」瞑想の発生・語源から両者を比較する。最初に jhāna (ジャーナ：禅) と (samādhi : 定) の違いについて、次に samatha (サマタ：止) と vipassanā (ヴィパッサナー：観) の違い、並びに、vipassanā と sati (サティ：念) との別を明確にすることで、状態や技法としての「禅」瞑想と「マインドフルネス」瞑想の違いについて紐解いて行きたい。(かとう ひろき)

小室央允 初学者への座禅の導入

座禅は仏教における修行のひとつである。特に、禅宗である曹洞宗では座禅を重視している。そのような座禅は、僧侶だけが行う特別な修行であると考えられる人もいるかもしれない。しかし、僧侶や仏教徒だけが行う特別な修行ではなく、広く一般でも行える瞑想である。

過去の座禅の心理学的研究として、主に高僧を参加者とした生理測定が行われてきた。その特徴として、脳波の高振幅徐波や呼吸代謝の低下などがあげられている。では、座禅瞑想の初学者が座禅を行った場合はどうであろうか？

座禅では調身調息調心の均衡が重要となるが、初学者には結跏趺坐の姿勢や心の錯乱など、多少困難な面がある。そこで、座禅の導入法として、身体的負荷の少ない椅子座禅と、呼吸が調い易く心の錯乱が抑制される数息観を行い、初学者の座禅導入における心理学的・生理学的特徴を検討する。

(こむろ ひさよし)

竹内啓恵 森林散策カウンセリングの概要

「森林散策カウンセリング」とは、森林環境をクライエントとカウンセラーが散策しながらカウンセリングを行う形式のカウンセリングである。カウンセリングを行う野外の自然環境には樹木、植物、土壌、そして昆虫、小動物などの生命が存在する。また天候や季節の変化により散策可能な時間は限られる。しかし、これらの自然空間は、現代社会の、特に都市部に住む人々にとっては非日常空間となり、なかでも疲れた人々にとっては癒しの空間となることが少なくない。そのため、森林散策カウンセリングの大きな特徴として、まずクライエントが日常生活から解放され、気持をリフレッシュし、リラックスできることが重要である。このプロセスがあって、始めて、森林散策カウンセリングにおけるカウンセラーとの信頼関係は構築される。(たけうち ひろえ)

李 同帰 身心互動療法 蒙医心身インタラクティブ療法の概要

蒙医心身インタラクティブ療法は、内モンゴル国際蒙医病院内の納貢畢力格博士によって創始され、中国内モンゴル自治区で広く使われている新型の心理治療法である。この療法は伝統的な蒙医心身医学理論に現代の心理学理論と技術を結び付け、音響、光、電気、映像などの手段を用いてインタラクティブ効果を作り出す。健康教育と心理催眠技術を有機的に結合し、人の心理的エネルギーと生理的潜在エネルギーを刺激して病気の治療を試みるものである。療法は強化治療と維持治療の二種類に分けられる。強化治療は6種類の治療で構成され、維持治療は4つの自助形式の治療からなる。異なった形式の治療はそれぞれ違った効果が有るとされる。この方法は乾癆などの病気に対して優れた効果があるが、その作用メカニズムについては、さらに研究する必要がある。

(り とんぐ)

長澤里絵 指定討論

アジアからの発信というテーマでのワークショップであるが、アジアからどこへ向けた発信なのか。欧米発祥の理論や心理療法等は、アジア少なくとも日本では幅広く取り入れられているが、逆は数多くはない。そこで、今回お話しただくカウンセリング、心理療法の対象はアジアに限定されているのか否か、文化や宗教の違いにより異なるのかといった視点からご質問させていただく。(ながさわ りえ)

高橋良博 指定討論

日本発祥の心理療法として、森田療法、内観法、臨床動作法などがある。また伝統的な宗教的行の中に含まれるボディ・ワークを治病・養生法として活用してきた長い歴史も存在する。現在ストレス・マネジメントや心身症の治療など、心療内科をはじめとする臨床の現場で呼吸法や各種の瞑想法などが活用されている。そうした状況を踏まえて、ここでは各話題提供者の報告内容から、その治療的側面と臨床応用の可能性について、お話をうかがってゆきたい。今回は禅とマインドフルネス、森林散策カウンセリング、内蒙古の心身互動療法が話題として提供されるが、いずれもボディ・ワークを含む点での共通性があると思われる。

(たかはし よしひろ)

喪失の悲しみを越えて

ー マイクロカウンセリングからのアプローチ ー

企画者：福原真知子（常磐大学）、荻野七重（白梅学園大学）

司会者：藤田圭一（日本体育大学）

話題提供者：福原真知子（常磐大学）、山本孝子（大阪人間科学大学）、玉瀬耕治（奈良教育大学）

指定討論者：横田正夫（日本大学）

キーワード：マイクロカウンセリング、喪失の悲しみ、応用心理学

【企画趣旨】

平成から令和の時代へ移行しても、世界各地で起こる紛争以外に、自然災害や事件事故、身近な人々との別離や職場からの離脱など、私たちはそれに伴って生じるさまざまな喪失の感情に取り囲まれている。数限りない喪失による悲しみの体験を受けた人々は、決して悲嘆に立ち止まるのではなく、自ら立ち向かい、乗り越えていこうとするものである。

このワークショップでは、「喪失の悲しみを越えて」というテーマについて、マイクロカウンセリングの視点から、どのように関わることができるのかを、登壇者とともに考える。

【話題提供】

◆Science into Real Life Situation

福原真知子（常磐大学）

近年、人間のWellnessにかける心理学諸領域が、隣接領域とコラボし、そのミッションを果たしながら発展を目指すという世界的傾向が顕著になってきたように思う。これはほかならぬ、'Science into Real Life Situation'への挑戦である。

国際応用心理学会(IAAP)はPsychotechnics Applied to Vocational Guidanceを掲げて、応用心理学のユニークなシステムをスタートさせ、今に続くミッションとして「科学的心理学の応用とその実践を励ましている。なんのため、どのように、が課題である。

歴史は新しい世紀を迎えたが、対象となる人間はさまざま(multicultural being)である。共通の特性としては自己の肯定感とともにウェルビーイングを求める。そのため多様な行動には情動、感情、思考など生理的レベルから行動レベルまで、さまざまな事象が内在一顕在化される。日常的に起こる「喪失」にまつわる事象もそのひとつである。これは人々が直面する事実であり、回避することはできない。当然その目的(ウェルビーイング)に支障をきたすであろう。けれど人人はその問題を解決しなければならない。

マイクロカウンセリングの創始者であるアイビィ,Aは、ポジティブ心理学の立場からその問題解決を提案している。それは援助関係におけるマイクロカウンセリング技法の適用である。最重要課題は'listening'でありこれはempathyに導くものであるとする。ここにはいくつかの鍵概念がある。すなわちこれは緩やかではあるが、理論的に納得するシステムにおいて運ばなければならないということである。これらについて出来れば少々の事例を提示し説明したい。

◆マイクロカウンセラー「喪の作業」へのよりそい 山本孝子（大阪人間科学大学）

2018年は、広島や大阪など、私にとって身近な地域での自然災害が多い年であった。このような災害は突然やってくる。そして、それまで平穏であった日常をあっという間に壊し、深い爪痕を残して去っていく。そんなとき、国や自治体が動き出す前にいち早く被災者のために自分のできることは何かを考え迷わず行動にうつす一般の人々の存在を、今回も新聞やテレビ報道で多く見聞きした。そのような方々の活動を紹介し生きる意味の観点から考察するとともに、われわれ心理

の専門家がマイクロカウンセリングの傾聴技法を携えて行うことのできる活動とはいったい何なのか、真の出番はいつなのか、について検討したい。

被災された方々は、家の復旧作業や行政の手続き、故人の葬儀などに追われて時間が過ぎていく。それらが一段落し日常生活が戻ってくると、喪失感がより強く感じられる。すべての感情を忘れてしまったかのように無感情になる方、絶望感や家族を助けられなかった自責の念、やり場のない怒りの感情にさいなまれ、突然涙が止まらなくなったり、うつや引きこもりの状態に陥ってしまわれる方もいらっしゃる。しかし、このように心が揺れ動くのは、むしろ自然な反応である。

専門家としてのよりそいは、このようにある程度時間が経過し、あらためて寂しさや悲しみが募ってくる、そのような時期にこそ必要なのではないだろうか。「喪の作業」は重要である。悲しみの気持ちを押し殺したまま生活を続けると後に心の病気を発症する場合もあり、信頼のおける誰かに悲嘆を吐き出すことは心の健康にとって欠かせない。「喪の作業」によりそう際に心理の専門家としてマイクロカウンセリングの基本的傾聴技法を用いてどのように人々の心を聴き、積極技法を用いてどのようにそのまなざしに良い影響を与えwell-beingへと導いていくことができるのか、自身の経験をもとに考えを述べたい。

◆マイクロカウンセリングにおける発達論的視点から

玉瀬耕治（奈良教育大学）

地震、台風、豪雨などによって被災された方、身近な人や動物の死に直面された方、強盗、強姦などの被害に会われた方など、予期せぬ出来事による喪失のかなしみの最中にある方々に有効な援助のあり方とはどのようなものであろうか。さまざまなアプローチが考えられているが、マイクロカウンセリングの立場では、このような問題をどのように扱うべきであろうか。アレックス・アイビィはマイクロ技法を活用してカウンセリング・心理療法の実践を行う際にはピアジェの認知発達理論を採用して彼が提唱した発達カウンセリング・心理療法(DCT)理論が有用であると考えている。

この理論では、クライアントの状態を認知発達論的に捉えた4つの認知発達のスタイルを特定し、そのスタイルに即してより適切なマイクロ技法を適用することが有効であると考えている。これは喪失のかなしみに特化したものではないが、このような対象者がこの理論ではどこに位置づけられるかを考えることが必要である。DCTでは、感覚運動的スタイル、具体操作的スタイル、形式操作的スタイル、弁証体系的スタイルの4つのスタイルが区別されるが、喪失のかなしみの最中にある人々は、当面は感覚運動的スタイルが優位な状態に置かれていると推測される。このような人々への援助で優先されるべき技法は、もっともマイクロ技法階層表の基底に位置づけられているものと考えられる。言葉での対応に入る以前の非言語的なかかわり技法の重要性が第一に指摘できよう。言葉巧みにかかわるよりも全身全霊で献身的に接する態度こそ受け入れられると言えるのであろう。

(ふくはらまちこ・おぎのななえ・ふじたしゅいち・やまもとたかこ・たませこうじ・よこたまさお)

地域性(県民性)を明らかにする

—2 か所以上の地域で暮らした場合の地域差について—

企画・司会: 浮谷秀一(東京富士大学)
 話題提供者: 桐生正幸(東洋大学)
 話題提供者: 川本利恵子(湘南医療大学)
 指定討論者: 齊藤勇(立正大学)
 指定討論者: 玉井寛(朝日国際医療福祉専門学校)

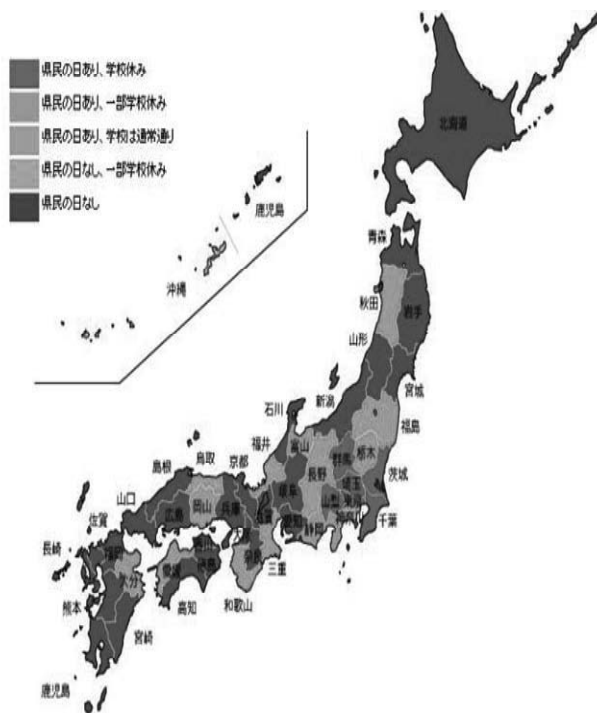
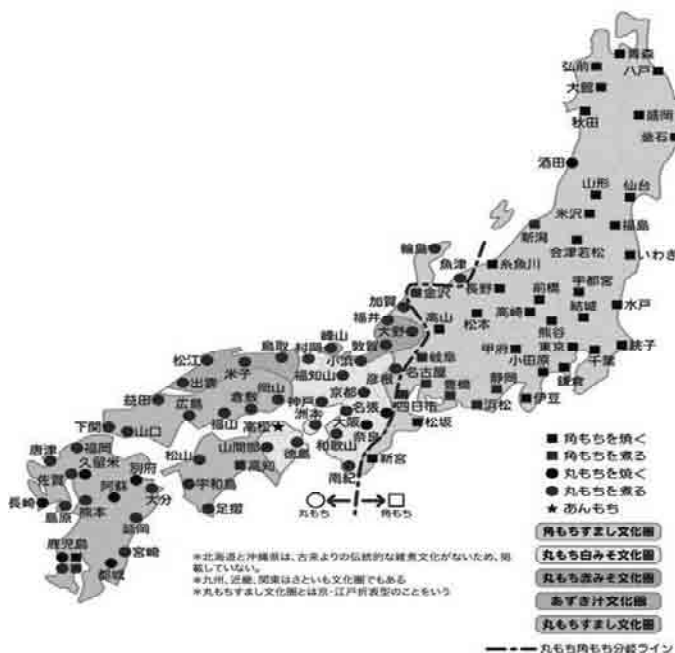
前回は、『ことばの県民性(方言)が現在も存在するのか 一生まれてから続けて特定地域で暮らして人の場合—』というテーマで、愛知県代表として二宮克美氏(愛知学院大学)、福島県代表として鈴木智子氏(福島学院大学)、茨城県代表として菊池やす子氏(教育相談員)に、テーマを「ことば」に絞って発表してもらい、議論した。

内容としては、今までどのように地元のことば(方言)に関わってきたか、現在地元特有のことば(方言)が存在するのか、そしてどのくらいの頻度で使っているか、どのような方言があるかなどを発表していただいた。そこからわかったことは、地域性はあるが、だんだん薄れてきているということであった。これは、われわれを取り巻く多彩なメディアによるものと考えられると指摘された。

【企画の趣旨】前回のワークショップにおいて一部明らかになった同一地域に暮らし続けていても他地域の影響をどうしても受けてしまうということを踏まえ、逆に2 か所以上の地域で暮らしたことがある方に、暮らしたことのある地域間の違いについて話してもらうことで地域性(県民性)を明らかにできないか考えたのである。そのために、テーマをことば(方言)にこだわらないで話を進めていこうと考えている。

登壇者を話題提供者と指定討論者と分けて指定しているが、話題提供者の桐生正幸氏は、山形県、兵庫県、東京都での暮らしを、川本利恵子氏は、福岡県、愛知県、東京都での暮らしを、齊藤勇氏は、山梨県、東京都での暮らしを、玉井寛氏は、千葉県、福島県での暮らしをそれぞれ経験している。登壇者皆さんから地域性について話していただけると考えている。

地域性のみられる例を次に挙げておく。



(うきや しゅういち・きりう まさゆき・かわもと りえこ・
 さいとう いさむ・たまひ ひろし)

心理学における実践

現場研究の発信とその課題

企画・司会： 田中堅一郎¹

話題提供者： 西山浩次¹ 村田教枝² 小林敦子³ 二瓶 哲²

(¹ 日本大学大学院総合社会情報研究科 ²(株)タップクリエート ³ユナイテッド・ヘルスコミュニケーション株式会社)

キーワード：職場環境, キャリア, 研修

【企画の趣旨】

自分の業務をもちながら、職場環境への実践的な研究課題を行っている「プロの研究者」ではない会員から、現場の問題意識から生まれた実践的研究を報告する。いわゆる「プロの研究者」では見逃しがちな論点や、研究実施についての問題点を提示する。

企画者(田中)は常々応用心理学の学会発表で現場からの発信がほしいと思っているのだが、質量ともかならずしも十分でない。私見であるが、現場の人々は自ら研究するリテラシーに自信がないようで、いわゆる「研究者さん」任せになり、一方「研究者さん」の多くは現場の実情あるいは職場で働く人々が本当は何に問題を抱え何に困っているか、本当のところ無理解である。そこで今回は、「現場の人」として学術研究を行っている方に話題提供をお願いした。

今回の企画では、現場で働きながら行った話題提供者の研究成果(あるいは経過報告)を交えながら、働く現場で研究を実施する際の問題点、研究成果を学術雑誌に投稿した際に、論文審査者が現場では「常識的」な実情をもう少し理解してほしいなどの話題提供者の意見が提示される。

【話題提供者】

西山浩次：キャリアコンサルタント養成講座での学習経験の効果 —キャリアコンサルタント養成講座参加者のコミットメント変化のPAC分析—

本研究は、キャリア支援の専門家となるキャリアコンサルタントの養成プログラムの受講経験から、①学習し得られたテーマ、その中でも今後の専門職としてのコミットメントを高めると思われる考えと、②受講経験を通じて改めて自分にとって不足していた・不十分だったテーマを探索し、③受講経験の中で何が学習の促進要因になっているかを検討することを目的として実施された。調査には個人の意識・態度などのイメージを捉える手法であるPAC分析(Personal Attitude Construct Analysis)を活用しPAC分析における追加項目の有効性を検討した。具体的には調査協力者が連想項目を書き出したのちに「不足していた・不十分だった考え」「今後のコアとなる考え」という2つの追加項目を加えた分析を実施し、これらの追加項目を含まないデンドログラムと追加項目を加えたデンドログラムの比較を通じたインタビューを実施し、2名の現職及び非現職の調査協力者のプログラム受講を通じてのキャリアや専門家としての意識の変化・学習したテーマなどを明らかにした。

村田教枝：看護・福祉分野における一視点 —心理学研究の実践—

看護・福祉の現場において、患者(利用者)・家族、職場の同僚や多職種など幅広い多様な対人関係を円滑に構築していくことは業務を遂行する上で必要不可欠である。しかし、多様な対人関係の構築や職場の機能を円滑に遂行するための実践は、個人の能力に委ねられていることが多く、それらを効果的に実践していくことは個人差や困難さが多く見受けられる。

一例として、私は看護師として臨床現場においてリーダー

シップの役割に困難さ痛感し、心理学の視点で調査研究を行った。心理学研究の蓄積を知り考え方や価値観が大きく変化することができ、実践に活かすことができた。それらを職場内や同業職種者に活かせるよう伝達をするが、研究の理解に困難さがあり、現場で心理学研究を活用していくためには創意工夫が重要であると学んだ。また、現場で直面している問題は他施設においても同様の困難さを抱えているが、解消されることは少なく、研究と現場の細やかな橋渡し役が重要な役割を担っていると感じる。

小林敦子：職場のジェンダー・ハラスメント低減への試み

就業女性が昇進しにくいという、いわゆる「ガラスの天井」の問題の解決には、職場に蔓延するジェンダー・ハラスメントへの対策が不可欠だ。ジェンダー・ハラスメントは「性に基づく役割を他者に期待する言動」であり、就業女性を基幹的な役割から遠ざけ、周縁的な役割に押しとどめようとする。本報告では、女性の活躍を阻むジェンダー・ハラスメント抑止を目的として、試行的に実施した(あるいは進行中の)研修とその効果測定の結果を紹介する。

現在進行中の管理職研修プログラムは、ステレオタイプやジェンダー・ハラスメントを行う頻度との関連が予想される、部下に対する認知的複雑性にフォーカスしている。研修により、管理職の部下への認知的複雑性を高めることができれば、ステレオタイプが低減され、ジェンダー・ハラスメントの抑止が期待できるだろう。また、その研修効果の測定のために、研修前後および事後で質問紙調査(認知的複雑性、ステレオタイプ(紙筆版IAT)、ジェンダー・ハラスメント)を実施する。これらの試みは、より効果的なハラスメント防止研修構築の足掛かりとなるだろう。

二瓶 哲：学術研究と実業現場をより近づけるために —研修インストラクターの立場としての提言—

現在、数多くの研修インストラクターが企業等の事業組織における人材育成の現場で活動している。研修の構成要素は、コンテンツ(内容)とデリバリー(内容の提供)の2つが挙げられ、研修インストラクターは、これら2要素がきちんと噛み合うような運営を行っている。また、コンテンツについては、その全てまたは一部を開発することもある。

本テーマの主旨は、研究者と研修インストラクターが関わる場をより多く創出することにより、互いのメリットが享受され合うのではないかと、ということである。具体的には、コンテンツの観点において、研修インストラクターが研究者によるサポートで、学術論文へのアクセスおよびその理解が促進されれば、研修のさらなる充実化が図られるのではないかと、デリバリーの観点では、研修において参加者が現場の状況を発信・共有する場が多くあることから、これらの情報が研究者にも共有されれば、研究者が新たな学術研究テーマを探索する助けとなるのではないかと、ひいては、両者の連携が学術、実業の発展に貢献するのではないかと考える。

(たなか けんいちろう・にしや まこうじ・むらた のりえ・こばやし あつこ・にへい さとる)

インターネット上の言説の分析

偏見・差別研究を題材に

○高 史明（非会員）
（神奈川大学人間科学部）

キーワード：インターネット、ソーシャル・メディア、計量テキスト分析

【目的】

日本においては、インターネットは既に広く普及し、日常生活においてなくてはならないものになっている。そしてネットユーザーたちは、ネットを使用している間に、観測可能な足跡を様々な形で残す。

本研修の講師は、Twitter その他のオンラインメディアのデータを活用した研究の経験を有している。その経験をもとに、①利用可能なデータ資源の紹介、②分析事例の紹介、③倫理的な問題などについてお話ししたい。題材としては、これまで行ってきた在日コリアンや被差別部落出身者への偏見・差別研究を主に取り上げるが、そうした問題に関心のある方々だけでなく、様々な関心領域に応用可能なノウハウをお話しする。

【研修内容】

1 利用可能なデータ資源

日常的なコミュニケーションと異なり、ネットを介したコミュニケーションでは多くの情報がデータとして自動的に記録される。近年では、こうして記録された膨大なデータ＝ビッグデータを用いた研究やマーケティングも盛んになされるようになってきている。とはいっても、ユーザーのプライバシーや事業者の営業上の利益に関わるような情報は、守秘義務を伴う共同研究契約を結んだ場合などを除き利用することはできず、利用へのハードルは高い。

しかし中には、特別な制約なしに一般の研究者が利用可能なデータも存在している。例えば、一部の SNS 上の投稿やフォロー／フォロワー情報、掲示板やブログでの投稿、ある語句が Google で検索された回数やその語とともに検索された語の推移などである。

こうした、一般の研究者でも利用しやすいデータ資源とその利用しかたを紹介する。

2 分析事例

上記のデータ資源を用いて行った分析事例を紹介する。

まず、Twitter 上の投稿データを用いて在日コリアンに関する言説の分析を行った研究を紹介する。ここでは、投稿の持つ自然言語データに対する計量テキスト分析、ユーザーごとの投稿回数の（偏った）分布などの分析を紹介する。

また、オンライン調査会社に委託して行った自己報告式の調査のデータと Twitter のデータを組み合わせて、炎上現象に参加したユーザーの特性やネットワーク構造を分析した共同研究（立命館大学小川祐樹氏、東京大学鳥海不二夫氏らとの共同研究）についても紹介する。

新たな研究を始める際の手がかりのつかみ方の解説は、被差別部落問題についての簡単な分析事例を用いて行う。特に Google Trends や Google 検索を用いて、社会における特定の問題への関心の強さがどう推移してきたか、またその変化のきっかけは何であったのかなどを知るためのノウハウをお話しする。

さらに、こちらは一般の研究者が利用できるデータによるものではないが、株式会社サイバーエージェントが運営するインターネットテレビ、AbemaTV のコメントデータを用いて、差別的投稿をもたらす番組の要因とユーザーの要因を分離した研究事例（サイバーエージェント社高野雅典氏らとの

共同研究）も紹介する。

3 倫理的問題

オンラインの情報は様々なメリットを研究者にもたらすが、それゆえに心理学者が用いる通常の研究手法（質問紙調査や実験室実験）では生じない種類の倫理的問題が生じる場合がある。倫理的配慮は、一般市民の利益を不当に害するのを避け、心理学者の専門家としての社会的地位を維持するために必要不可欠である。

そもそもどのような場合にオンラインのデータの利用が許容されるのかや、利用自体は可能であったとしても利用のしかたによって問題が生じるのはどのような場合なのかなどについて、具体的な事例（失敗事例も含む）も挙げつつ議論する。

（たか ふみあき）

PAC分析の理論と実施技法

内藤 哲雄

(明治学院大学 国際平和研究所)

キーワード：PAC分析、関連する理論と技法の差異、利活用のポイント

【はじめに】

技法開発の動機は、実験社会心理学を主専攻とした後に、6年6ヵ月にわたって臨床心理学担当の専任の職に就き、再び元来の専門である社会心理学の講座を担当するようになって、「個」の独自性や豊穡を看過できないと感じたことによる。PAC分析のPACは、Personal Attitude Construct(個人別態度構造)の略称であり、“パック”と発音される。当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスターのイメージや解釈の報告、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。当該テーマに関する検査項目を対象者自身が連想し、ただ一人の対象者が暗黙のうちにもつ潜在構造を、その人の回答した類似度距離行列を用いてクラスターを算出する。ついで、被検者に寄り添いながら、被検者のクラスターや項目のイメージ報告を検査者が間主観的に了解していくところに特異性がある。繰り返しデータがなく、平均値も分散もないのに、記述統計学を援用して、当該個人独自の態度やイメージの構造を分析する。典型者、少数の該当者、個人個人の個人分析に適している。

PAC分析では、独自の体験を含めて当該現象に関連すると当人が感じるすべての変数にアクセスすることから、主體的、独自の、創造的、歴史的、社会的、超越者的な、当該個人特有の全体構造の分析となる。Allportが指摘しているように、個人のパーソナリティには、全ての人をもつ「共通特性」と個人独自の人特性」の二種の特性が存在する。パーソナリティ検査には行動予測力がないといわれる。これは、個人特性を無視して、共通するパーソナリティ変数(だけ)では個人の行動予測力が高くないことを示すものである。態度についても同様のことがいえる。個人分析の結果は、Lewinの場理論、Jungのコンプレックス構造、Berneの交流分析(TA)での脚本分析、Gendlinのフォーカシング、認知行動療法など、個に関する多様な実践、研究に利活用できる。被検者が長期記憶や暗黙裡の潜在構造にアクセスしやすくなるような、検査者の読み上げや応答のスピードや間の取り方をし、同行しながら探索を繰り返し要請する技術が、通常ではアクセス困難な内界深くの潜在構造を引き出す。事例を操作的、客観的に分析でき、当該テーマについてアクセスされた被検者の内界を、検査者が同行しながら了解していく過程は、第三者が了解していく過程ともなりえる。コンサルテーションのツールとして有効で、学位論文の主査や副査が事例を了解していく手段ともなる。ただし、「操作的・実験的・(記述)統計学的手法と、間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両方が包含されており、両技法を習熟しているものは少ない。ワークショップでは、他の理論や技法との違い、潜在的イメージの持つ意味、研究テーマの発見法、被検者の内界探索の方法、価値創造的な解釈の仕方を実習形式も含めて実践的に学ぶ場としたい。

<関連するアプローチ、理論と技法の違い>

多標本調査：平均値と分散による共通の普遍性の解明

PAC分析：被検者にとって関連すると感じられる変数の全て

(共通特性と個人特性)

<単一事例分析と諸技法の比較>

SD法、P技法、Q技法、レパトリーテスト、1事例実験

*尺度観、意味空間、世界観の違い

<研究テーマの発見→連想刺激の作成>

視点の転換

- ・独自の・独創的研究テーマを見つける
- ・視点転換の努力を続ける
- ・構成概念の創造
- ・製品開発、商品開発(大量の類似品が普及する前で開発者の頭の中にしか存在しない)

<イメージの聴取・探索>

- ・身体感覚を感じる
- ・感覚変化のスピードを感じる
- ・共感し、同行する
- ・話しかけるスピードによるコントロール
- ・単語の間、文章の間をコントロール
- ・自分のイメージを誘導する
- ・相手のイメージを誘導する
- ・長期記憶にアクセスさせ、探索させる
- ・イメージが湧くまで待つ
- ・内界奥深くを探索させる
- ・「もうない」からが始まり

<データの解釈>

- ・デンドログラムの連想項目、聴取したイメージを丹念にたどる
- ・全体がゲシュタルトとしてまとまるのを待つ
- ・結果を先行研究と関連づけて解釈する
- ・他の人がまだ考えていない価値創造的な解釈を、最後の1分1秒まで求める
- ・シミュレーションによる一般化の確認(他の事例を抱負に思い浮かべ、何が起きるかをイメージしてみる)
- ・自我防衛的にならないようにして、自己批判をしてみる
- ・別の解釈可能性を忘れない
- ・連想項目は個人独自のニュアンスやエピソード記憶とも連結しており、それらがクラスターを構成する時、クラスターの連想価は爆発的に高まっていく。(連想刺激→連想反応項目→クラスターの束→クラスター間比較を通じて、内界の奥深くまで探索が続く)

<開発の継続>

- ・さらにさらに問題、テーマを掘り下げていく。
- ・自分自身の体験の蓄積から暗黙のスキーマが形成されることが多い。帰納法と演繹法を循環させ、自信の無意識世界に光り、視点をあて何が連想されてくるかを探り続ける。暗黙知、「クライアントは自らが知っている以上のものを捉えている」のである。

(いとう たけひこ)

口頭発表1 8月24日(土)

口頭発表1 教育・人格・福祉・その他(会場：2202 教室) 10:00~11:20

座長 河野 千佳・片岡 大輔

- | | | | |
|-------|-----------------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 01-01 | 学生はプロジェクト型科目におけるプロセスマネージを意識するか(2) | ○ 伊東 昌子 | 常磐大学人間科学部 |
| 01-02 | 管理職を対象にした主要5因子性格特性尺度の構成 | ○ 片岡 大輔 | 株式会社日本能率協会マネジメントセンター |
| 01-03 | 創造性とユーモア | ○ 森田 亜矢子 | 関西大学人間健康学部 |
| 01-04 | 日印の大学生にみる現実的楽観主義とwell-being | ○ アニーシャ
ニシャート
鉤 治雄 | 創価大学大学院文学研究科
創価大学教育学部 |

口頭発表2 8月25日(日)

口頭発表2 犯罪・社会・産業・災害(会場：2202 教室) 10:00~11:40

座長 軽部 幸治・伊坂 裕子

- | | | | |
|-------|---|---------------------------|------------------------------|
| 02-01 | 自己効力感と2種類の貢献感が援助要請意図に及ぼす影響 | ○ 静間 健人
土田 昭司 | 関西大学大学院社会安全研究科
関西大学社会安全学部 |
| 02-02 | 職場雰囲気がワーク・ファミリー・バランスを媒介して仕事継続意欲に及ぼす影響—生涯発達の観点から— | ○ 原 健之 | 白百合女子大学大学院 |
| 02-03 | セルフコンパッションの高い人ほど就職活動の不採用に挫けないのか—2017年度及び2018年度就職活動生を対象とした前向き研究— | ○ 宮川 裕基
谷口 淳一 | 追手門学院大学心理学部
帝塚山大学心理学部 |
| 02-04 | 犯罪に関するイメージ調査— SCITの質問項目の検討 — | ○ 軽部 幸浩
石岡 彩香
桐生 正幸 | 日本体育大学
駒澤大学
東洋大学 |
| 02-05 | 刑務所と地域の連携：カナダ連邦・州刑務所の地域連携事例の報告 | ○ 上瀬 由美子 | 立正大学心理学部 |

ポスター発表1 8月24日（土）

ポスター発表1（会場：食堂マロニエ） 15:45～17:45

在籍責任時間 奇数番号 15:45～16:45 偶数番号 16:45～17:45

認知

- A-01 においを手がかりとする自伝的記憶の想起に要する時間に関する検討—プルースト現象は特別か？ ○ 小林 剛史 文京学院大学人間学部
白井 真菜美 文京学院大学大学院人間学研究科

教育

- A-02 被受容感が自尊感情に与える影響—ソシオメーター理論とその影響の時期について— ○ 木下 雅博 甲南大学人間科学研究所
大西 彩子 甲南大学文学部
- A-03 教員及び学生から見た学校支援ボランティアの現状と課題 ○ 高田 莉恵 帝塚山大学大学院心理科学研究科
中地 展生 帝塚山大学心理学部
- A-04 新入社員の人材育成—企業が求める自律型人材の育成—
【教育発表】 ○ 柴田 隼 日本大学商学部
田崎 ほのか 日本大学商学部
後藤 祐里奈 日本大学商学部
臼谷 海都 日本大学商学部
伊東 由菜 日本大学商学部
外島 裕 日本大学商学部
- A-05 特別支援教育における対象の拡大に関する研究（1）—「特別支援教育」をどう考えているのか— ○ 石橋 裕子 帝京科学大学
林 幸範 滋賀短期大学
- A-06 部活動認証制度の創設のための事例研究「生徒の意識」に着目した部活動指導プログラムの実践 ○ 大門 耕平 近江兄弟社中学校・高等学校
伊藤 将史 近江兄弟社中学校・高等学校
来田 宣幸 京都工芸繊維大学
- A-07 小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（3）—中学生における自己価値確認の効果の再検証— ○ 埴田 健司 東京未来大学モチベーション行動科学部
小林 寛子 東京未来大学モチベーション行動科学部
磯 友輝子 東京未来大学モチベーション行動科学部
日向野 智子 東京未来大学こども心理学部
高橋 一公 東京未来大学モチベーション行動科学部
角山 剛 東京未来大学モチベーション行動科学部
- A-08 小中学生の学習行動を促進する介入方法の検討（4）—小学生における利用価値確認の効果の再検証— ○ 小林 寛子 東京未来大学モチベーション行動科学部
埴田 健司 東京未来大学モチベーション行動科学部
磯 友輝子 東京未来大学モチベーション行動科学部
日向野 智子 東京未来大学こども心理学部
高橋 一公 東京未来大学モチベーション行動科学部
角山 剛 東京未来大学モチベーション行動科学部

人格

- A-09 セルフ・コントロール，情報処理スタイルおよび過剰適応の関係 ○ 小橋 眞理子 立正大学大学院心理学研究科
井田 政則 立正大学心理学部
- A-10 一人ひとりに合わせた新人教育
【教育発表】 ○ 板倉 悠斗 日本大学商学部
市川 春奈 日本大学商学部
大塚 涼平 日本大学商学部
櫻井 怜奈 日本大学商学部
杉山 怜香 日本大学商学部
高橋 香貴恵 日本大学商学部
外島 裕 日本大学商学部
- A-11 ストレスフルな出来事への意味づけや対処可能感とSOC（首尾一貫感覚）の関係について ○ 銅直 優子 流通科学大学人間社会学部人間社会学科

臨床

- A-12 女性における醜形恐怖心性とBig Fiveとの関連 ○ 大村 美菜子 目白大学人間学部心理カウンセリング学科
- A-13 主観的ウェルビーイング研究の動向 ○ 角野 善司 高崎健康福祉大学人間発達学部
- A-14 擬人化エージェントを用いたカウンセリングの可能性に関する検討 ○ 岩崎 和子 京都工芸繊維大学大学院
来田 宣幸 京都工芸繊維大学

福祉

- A-15 福祉職員に対する研修とコンピテンシー変化ー心理テスト（行動特性診断）による研修効果の測定 ○ 星 洋 一般社団法人 行動特性研究所
丹羽 勝 株式会社エイデル研究所
- A-16 あいまいな喪失を体験した子どもへの保育士による支援の実態と課題：質問紙調査の量的分析結果から ○ 加藤 恵美 静岡県立大学短期大学部
いとう たけひこ 和光大学
井上 孝代 明治学院大学

看護

- A-17 患者の主観的体験への看護ー文献検討による枠組み構築の取り組み ○ 山本 勝則 天使大学看護栄養学部看護学科
- A-18 自己援助(self help)としての病院広報誌の役割 ○ 林 潔 白梅学園短期大学

健康

- A-19 ロコモ予防の健康教室参加者の継続性に関連する因子の検討 ○ 内田 誠也 一般財団法人MOA健康科学センター
山岡 淳 一般財団法人MOA健康科学センター

社会

- A-20 スマートフォンによるネット依存傾向と対人ネットワークの関連 ○ 黒川 雅幸 愛知教育大学教育学部
三島 浩路 中部大学現代教育学部
小西 達也 株式会社KDDI総合研究所
永田 雅俊 株式会社KDDI総合研究所
本庄 勝 株式会社KDDI総合研究所
米山 暁夫 株式会社KDDI総合研究所
- A-21 母親の就業形態と大学生の就業観および性別役割態度の関連 ○ 佐藤 舞 早稲田大学大学院文学研究科
- A-22 ブラック企業について 【教育発表】 ○ 中上 博絵 日本大学商学部
渡辺 茉耶 日本大学商学部
水野 愛美 日本大学商学部
時田 学 日本大学商学部
- A-23 ネガティブな体験の日常的な語り頻度と顕在的・潜在的態度の関連 ○ 佐藤 研一郎 中央大学大学院文学研究科
- A-24 行動の道徳性判断と関係流動性、文化的自己観の関連 ○ 伊坂 裕子 日本大学国際関係学部

産業

- A-25 期間限定と地域限定が購買意欲に及ぼす影響 ○ 濱 保久 北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科
- A-26 商店街の国民的キャラクター起用の有無と関心度から見るまちづくり 【教育発表】 ○ 山岡 駿介 日本大学商学部
高橋 七海 日本大学商学部
渡部 名美 日本大学商学部
岡野谷 和花 日本大学商学部
時田 学 日本大学商学部
- A-27 課題遂行順序が課題終了後のストレス反応に及ぼす検討 ○ 伊藤 晃碧 立正大学大学院心理学研究科
古屋 健 立正大学心理学部
- A-28 経営組織におけるメンタリングメンタリングとストレスの関連性 【教育発表】 ○ 遠藤 慧 日本大学商学部
小林 史佳 日本大学商学部
中園 翔太 日本大学商学部
生沼 萌 日本大学商学部
三田村 南美 日本大学商学部
外島 裕 日本大学商学部

- A-29 建築現場のハザード分類の検討 ○ 高橋 明子 独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所
- A-30 保育者の就業継続に必要とされる支援；日英比較研究を通じて ○ 山本 睦 常葉大学保育学部
- A-31 モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響—制御焦点に注目して—
【教育発表】 ○ 古橋 朋果 日本大学商学部
馬淵 里都 日本大学商学部
三好 駿之介 日本大学商学部
井上 裕珠 日本大学商学部
- A-32 異質のリスク—ベネフィット状況におけるリスクテイキング ○ 橋本 采栄 大阪大学大学院人間科学研究科
森泉 慎吾 大阪大学大学院人間科学研究科
中井 宏 大阪大学大学院人間科学研究科
臼井 伸之介 大阪大学大学院人間科学研究科
- A-33 上司からの被信頼が部下にもたらす心理的効用（2）：組織自尊感情に着目して ○ 藤原 勇 聖心女子大学現代教養学部

原理

- A-34 カイ2乗検定および事前検定を伴う分散分析の棄却率 ○ 服部 環 法政大学現代福祉学部
山際 勇一郎 首都大学東京人文社会学部

発達

- A-35 子どもをもたない有配偶女性の幸福感—就労形態からの検討— ○ 沼山 博 山形県立米沢栄養大学健康栄養学部
福島 朋子 岩手県立大学社会福祉学部

犯罪

- A-36 画像情報に基づいた筆跡の分類 ○ 関 陽子 科学警察研究所

交通

- A-37 道路横断時の利き手の挙手またはその手ぶりの心理的意味 ○ 長塚 康弘 新潟大学

スポーツ

- | | | | |
|--|------|--------|------------------------|
| A-38 社会的望ましさを排除した体罰容認度を測定する潜在的指標の開発：ST-IATを用いた検討 | ○ 大工 | 泰裕 | 大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会 |
| | | 内田 遼介 | 流通科学大学人間社会学部 |
| | | 寺口 司 | 大阪大学大学院人間科学研究科 |
| | | 綿村 英一郎 | 大阪大学大学院人間科学研究科 |
| | | 釘原 直樹 | 東筑紫短期大学食物栄養学科 |
| A-39 高校弓道選手に実施した心理的サポートの事例研究 | ○ 小松 | 健一 | アキラ株式会社 |

ポスター発表2 8月25日(日)

ポスター発表2 (会場: 食堂マロニエ) 14:45~16:45

在籍責任時間 奇数番号 14:45~15:45 偶数番号 15:45~16:45

認知

B-01 光沢の有無による視覚的な触感の違いに関する研究 ○ 稲葉 隆 日本カラーデザイン研究所

教育

B-02 中学生当時のいじめ被害が高校生の将来展望に及ぼす影響(1)ー入学前・入学後調査結果による検討ー ○ 三島 浩路 中部大学現代教育学部

B-03 知能観を変化させることは可能か ○ 市村 祐樹 株式会社SHP
井田 政則 立正大学心理学部B-04 学習動機が先延ばし行動に及ぼす影響 ○ 小野 洋平 駒澤大学
谷口 泰富 駒澤大学B-05 人材育成とキャリア開発
経験学習による個人視点のキャリア開発
【教育発表】 ○ 菊池 夏帆 日本大学商学部
伊東 拓海 日本大学商学部
可児 佑吾 日本大学商学部
原 みのり 日本大学商学部
堀内 勇吾 日本大学商学部
村松 真至 日本大学商学部
外島 裕 日本大学商学部

B-06 教職課程履修学生の能動的学習を活性化させる授業の在り方に関する検討 -養護教諭養成課程の実践を例として- ○ 亀岡 聖朗 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

B-07 大学生のボランティア経験が大学生活ストレスナーに与える影響 ○ 亀田 凌雅 帝塚山大学大学院心理科学研究科
中地 展生 帝塚山大学心理学部B-08 アニメ教材と協同学習によるコンフリクト解決教育: DVD「インデ島へようこそ」で植民地問題を考える ○ 井上 孝代 明治学院大学
杉田 明宏 大東文化大学
いとう たけひこ 和光大学
高部 優子 ビープロダクション

B-09 教育現場の中でロール・プレイングを生かすために ○ 時田 学 日本大学商学部

B-10 叱っている子どもが反抗する時への反応ー教職経験者へのKH coderによる分析ー ○ 佐藤 大輔 福島学院大学大学院心理学研究科

人格

- B-11 日本人の逆フリン効果及び
neurotoxicologicalな要因の可能性 ○ 廣島 克佳
- B-12 大村政男と血液型心理学
ー日本応用心理学会における活動を振り返って(4)ー ○ 藤田 圭一 日本体育大学
浮谷 秀一 東京富士大学

臨床

- B-13 助産師・保健師がとらえる妊婦・褥婦の心理
的特徴 ○ 河野 千佳 日本大学文理学部
和田 佳子 聖徳大学看護学部
櫻井 薫 防衛医科大学校医学教育部
横田 正夫 日本大学文理学部
- B-14 大学生におけるギャンブル依存傾向：プロセス
依存ならびにADHD傾向の関連性について ○ 大久保 純一郎 帝塚山大学心理学部
- B-15 専門病院入職初期の職員に対する不安緩和と
関係性構築を目的としたグループワークの効果 ○ 上野 まどか 明治学院大学心理学部附属研究所
いとう たけひこ 和光大学現代人間学部心理教育学科
- B-16 否定的・肯定的育児感情と養育行動の関連 ○ 岡本 大輔 甲南大学大学院人文科学研究科
大澤 香織 甲南大学文学部
磯部 美也子 奈良大学社会学部
- B-17 患者さんの主体性を引き出すための理学療法
士のイメージ～経験3年目の理学療法士を対象
として～ ○ 宍戸 唯人 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東
内藤 哲雄 北福島病院
明治学院大学

福祉

- B-18 記憶力が低下した認知症者への介護における
PAC分析ーベテラン介護福祉士を対象としてー ○ 伊藤 敦史 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東
佐藤 弘一朗 北福島病院
内藤 哲雄 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東
明治学院大学
- B-19 看護と介護の相互理解と業務の分担ー中堅看
護師を対象としたPAC分析ー ○ 佐藤 大輔 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東
桑名 美保 北福島病院
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東
内藤 哲雄 北福島病院
明治学院大学

看護

- B-20 診療補助以外の本来の業務への視点転換について—ベテラン看護師を対象として—
- 桑名 美保 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
遠藤 さやか 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
内藤 哲雄 明治学院大学
- B-21 回復期病棟の患者からの悩みや相談を受けやすい看護師—ベテラン看護師のPAC分析—
- 遠藤 さやか 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
桑名 美保 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
佐藤 弘一朗 一般社団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
内藤 哲雄 明治学院大学

健康

- B-22 大学編入志願生の精神的健康状態に関する研究
- 岡村 靖人 追手門学院大学大学院心理学研究科・日本学術振興会

社会

- B-23 AIとくっばを用いた科学的／非科学的対象物への印象評価差異の検討
- 高橋 綾子 東洋大学大学院
桐生 正幸 東洋大学
- B-24 20項目版SKY式精神性尺度の信頼性および妥当性の検討
— ソーシャル・キャピタルとの関連に着目して —
- 木村 友昭 MOA健康科学センター
伊坂 裕子 日本大学国際関係学部
内田 誠也 MOA健康科学センター
山岡 淳 MOA健康科学センター
- B-25 ムスリムイメージの日韓における等価性の検討
- 向井 智哉 東京大学大学院法学政治学研究
松木 祐馬 早稲田大学文学研究科
木村 真利子 立正大学大学院心理学研究科
金 信遇 ジェトロ・アジア経済研究所研究推進部
近藤 文哉 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科
- B-26 宗教信者イメージ尺度作成の試み
- 松木 祐馬 早稲田大学大学院文学研究科
向井 智哉 東京大学大学院法学政治学研究科
近藤 文哉 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科
金 信遇 ジェトロ・アジア経済研究所研究推進部
木村 真利子 立正大学大学院心理学研究科
- B-27 大学生が恋愛と結婚に求めるもの
- 山岡 重行 聖徳大学心理学科

産業

- B-28 老舗の「重み」が商品評価に及ぼす影響
【教育発表】
- 小嶋 優花 日本大学商学部
坂本 拓海 日本大学商学部
柴田 江玲奈 日本大学商学部
松田 健太郎 日本大学商学部
井上 裕珠 日本大学商学部
- B-29 職場交流活動の体系化に向けた試み
～探索的因子分析を用いて～
- 二瓶 哲 日本大学大学院総合社会情報研究科
田中 堅一郎 日本大学大学院総合社会情報研究科
- B-30 職務遂行行動への自己覚知研修の実践効果—
研修参加者6事例のフォローミーティングから—
- 外島 裕 日本大学商学部
- B-31 産業組織の部署間で発生するコミュニケー
ション・エラーとその要因の検討：産業組織
での行動をシミュレートする課題を使用した
安全研修のケーススタディ
- 工藤 大介 公益財団法人大原記念労働科学研究所
余村 朋樹 公益財団法人大原記念労働科学研究所
施 桂栄 公益財団法人大原記念労働科学研究所/
関東学院大学
細田 聡 公益財団法人大原記念労働科学研究所/
関東学院大学
井上 枝一郎 公益財団法人大原記念労働科学研究所
- B-32 カロリーはどこに表示すべきか？—カロリー
表示位置が食品選択に及ぼす影響—
【教育発表】
- 庄子 遼 日本大学商学部
杉田 篤也 日本大学商学部
畠 文槻 日本大学商学部
井上 裕珠 日本大学商学部
- B-33 PCキーボードのキースイッチの物理パラメー
タとユーザビリティの関連分析
- 富田 新 明星大学心理学部心理学科
- B-34 ビジネスマナーの効力感が就労者のウェル
ビーイングに与える影響
- 中嶋 葉子 成城大学大学院文学研究科
- B-35 現代における理想のリーダーシップとは
【教育発表】
- 佐藤 祐弥 日本大学商学部
山口 真莉 日本大学商学部
阿部 花菜子 日本大学商学部
長部 楓 日本大学商学部
佐藤 優希 日本大学商学部
本多 祥悟 日本大学商学部
外島 裕 日本大学商学部
- B-36 親会社と子会社・関連会社間における安全文
化の評価方法の検討
- 余村 朋樹 公益財団法人大原記念労働科学研究所
工藤 大介 公益財団法人大原記念労働科学研究所
施 桂栄 公益財団法人大原記念労働科学研究所/
関東学院大学
細田 聡 公益財団法人大原記念労働科学研究所/
関東学院大学
井上 枝一郎 公益財団法人大原記念労働科学研究所

災害

- B-37 2000年三宅島噴火から13年後の被災者の精神健康
 ○ 大森 哲至 帝京大学外国語学部外
 田宮 憲 帝京大学短期大学
 岩井 美路子 湘南歯科衛生士専門学校

発達

- B-38 青年の抱く自尊感情に関する研究(I)
 一幼少期のつらい出来事に対する両親の対応を通してー
 ○ 尾形 和男 埼玉学園大学人間学部
 増南 太志 埼玉学園大学人間学部
- B-39 青年の抱く自尊感情に関する研究(II)
 一幼少期に受けたしつけを通してー
 ○ 増南 太志 埼玉学園大学人間学部
 尾形 和男 埼玉学園大学人間学部

医療

- B-40 完治主義から多機能補完リハビリテーションへ
 ○ 佐藤 弘一郎 一般財団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
 宍戸 唯人 一般財団法人脳神経疾患研究所附属南東北福島病院
 内藤 哲雄 明治学院大学

犯罪

- B-41 虚偽検出検査における質問文の影響
 ○ 石岡 綾香 駒澤大学文学部

交通

- B-42 運転能力を過大評価する高齢運転者の特徴
 ○ 小菅 律 科学警察研究所
 岡村 和子 科学警察研究所
 中野 友香子 科学警察研究所
 藤田 悟郎 科学警察研究所
- B-43 保護者のシートベルト着用頻度とチャイルドシート使用との関連
 ○ 中野 友香子 科学警察研究所交通科学部
 岡村 和子 科学警察研究所交通科学部
 小菅 律 科学警察研究所交通科学部
 藤田 悟郎 科学警察研究所交通科学部

スポーツ

- B-44 長期的課題の遂行における情熱と希望 一楽 ○ 本多 麻子 東京成徳大学応用心理学部
観傾向群と悲観傾向群の比較—
- B-45 実動画とスティックピクチャを用いた ○ 堀内 俊孝 株式会社ジャパンスポーツネット
テニスフォームの印象評価について 来田 宣幸 京都工芸繊維大学

人名索引

氏名	ふりがな	
ア		
アニーシャ ニシャート	あにーしゃ・にしゃーと	27
阿部 花菜子	あべかなこ	36
伊坂 裕子	いさかひろこ	27, 30, 35
石岡 綾香	いしおかあやか	27, 37
石橋 裕子	いしばしゆうこ	28
磯部 美也子	いそべみやこ	34
磯 友輝子	いそゆきこ	28
板倉 悠斗	いたくらゆうと	29
井田 政則	いだまさのり	29, 33
市川 春菜	いちかわはるな	29
市村 祐樹	いちむらゆうき	33
伊藤 敦史	いとうあつし	34
伊藤 晃碧	いとうこうき	30
伊東 拓海	いとうたくみ	33
いとう たけひこ	いとうたけひこ	26, 29, 33, 34
伊東 昌子	いとうまさこ	27
伊藤 将史	いとうまさし	28
伊東 由菜	いとうゆいな	28
稲葉 隆	いなばたかし	33
井上 枝一郎	いのうえしいちろう	36
井上 孝代	いのうえたかよ	13, 15, 17, 20, 29, 33
井上 裕珠	いのうえゆみ	31, 36
岩井 美路子	いわいみちこ	37
岩崎 和子	いわさきかずこ	29
上野 まどか	うえのまどか	34
浮谷 秀一	うきやしゅういち	23, 34
白井 伸之介	うすいしんのすけ	31
白谷 海都	うすたにかいと	28
内田 誠也	うちだせいや	30, 35
内田 遼介	うちだりょうすけ	32

遠藤 慧	えんどうけい	30
遠藤 さやか	えんどうさやか	35
生沼 萌	おいぬまもえ	30
尾入 正哲	おいりまさあき	19
大門 耕平	おおかどころへい	28
大久保 純一郎	おおくぼじゅんいちろう	34
大澤 香織	おおさわかおり	34
大塚 涼平	おおつかりょうへい	29
大西 彩子	おおにしあやこ	28
大橋 信夫	おおはしのぶお	19
大林 裕司	おおばやしゆうじ	20
大村 美菜子	おおむらみなこ	29
大森 哲至	おおもりてつし	37
尾形 和男	おがたかずお	37
岡野谷 和花	おかのやのどか	30
岡村 和子	おかむらかずこ	37
岡村 靖人	おかむらやすと	35
岡本 大輔	おかもとだいすけ	34
荻野 七重	おぎのななえ	22
長部 楓	おさべかえで	36
小嶋 優花	おじまゆうか	36
小野 洋平	おのようへい	33

カ

角山 剛	かくやまたかし	19, 28
片岡 大輔	かたおかだいすけ	27
加藤 恵美	かとうえみ	29
加藤 博己	かとうひろき	21
可児 佑吾	かにゆうご	33
上瀬 由美子	かみせゆみこ	27
亀岡 聖朗	かめおかせいろう	33
亀田 凌雅	かめだりょうが	33
軽部 幸浩	かるべゆきひろ	27
川本 利恵子	かわもとりえこ	23
菊池 夏帆	きくちかほ	33
来田 宣幸	きだのりゆき	28, 29, 38
木下 雅博	きのしたまさひろ	28

金 信遇	きむしんう	35
木村 友昭	きむらともあき	35
木村 真利子	きむらまりこ	35
桐生 正幸	きりうまさゆき	23, 27, 35
釘原 直樹	くぎはらなおき	32
工藤 大介	くどうだいすけ	36
黒川 雅幸	くろかわまさゆき	30
桑名 美保	くわなみほ	34, 35
河野 千佳	こうのちか	27, 34
小菅 律	こすげりつ	37
越河 六郎	こすごうろくろう	19
後藤 祐里奈	ごとうゆりな	28
小西 達也	こにしたつや	30
小橋 眞理子	こばしまりこ	29
小林 敦子	こばやしあつこ	24
小林 剛史	こばやしたけふみ	28
小林 寛子	こばやしひろこ	28
小林 史佳	こばやしふみか	30
小松 健一	こまつけんいち	32
小室 央允	こむろひさよし	21
近藤 文哉	こんどうふみや	35

サ

齊藤 勇	さいとういさむ	23
坂本 拓海	さかもとたくみ	36
櫻井 薫	さくらいかおる	34
櫻井 怜奈	さくらいれな	29
佐藤 研一朗	さとうけんいちろう	30
佐藤 弘一郎	さとうこういちろう	34, 35, 37
佐藤 大輔(福島学院大学)	さとうだいすけ	33
佐藤 大輔(南東北福島病院)	さとうだいすけ	34
佐藤 舞	さとうまい	30
佐藤 優希	さとうゆうき	36
佐藤 祐弥	さとうゆうや	36
施 桂栄	しけいえい	36
宍戸 唯人	ししどゆいと	34, 37
静間 健人	しずまたけと	27

柴田 江玲奈	しばたえれな	36
柴田 隼	しばたはやと	28
庄子 遼	しょうじりょう	36
白井 真菜美	しらいまなみ	28
白木 三秀	しらきみつひで	13, 16, 17
杉田 明宏	すぎたあきひろ	33
杉田 篤也	すぎたあつや	36
杉山 怜香	すぎやまれいか	29
角野 善司	すみのぜんじ	29
関 陽子	せきようこ	31

夕

大工 泰裕	だいくやすひろ	32
高田 莉恵	たかたりえ	28
高橋 明子	たかはしあきこ	31
高橋 綾子	たかはしあやこ	35
高橋 一公	たかはしいっこう	28
高橋 香貴恵	たかはしかきえ	29
高橋 七海	たかはしななみ	30
高橋 浩子	たかはしひろこ	21
高橋 良博	たかはしよしひろ	21
高 史明	たかふみあき	25
高部 優子	たかべゆうこ	33
高見澤 由紀	たかみざわゆき	20
竹内 啓恵	たけうちひろえ	21
田崎 ほのか	たざきほのか	28
田中 堅一郎	たなかけんいちろう	24, 36
谷口 淳一	たにぐちじゅんいち	25, 27
谷口 泰富	たにぐちやすとみ	33
玉井 寛	たまひひろし	23
玉瀬 耕治	たませこうじ	22
田宮 憲	たみやけん	37
土田 昭司	つちだしょうじ	27
寺口 司	てらぐちつかさ	32
銅直 優子	どうべたゆうこ	29
時田 学	ときたがく	30, 33
外島 裕	としまゆたか	13, 17, 18, 28, 29, 30, 33, 36
富田 新	とみだあらた	36

ナ

内藤 哲雄	ないとうてつお	26, 34, 35, 37
中井 宏	なかいひろし	31
中上 博絵	なかがみひろえ	30
長澤 里絵	ながさわりえ	21
中地 展生	なかじのぶお	28, 33
中嶋 葉子	なかじまようこ	36
中園 翔太	なかぞのしょうた	30
永田 雅俊	ながたまさとし	30
長塚 康弘	ながつかやすひろ	31
中野 友香子	なかのゆかこ	37
西山 浩次	にしやまこうじ	24
二瓶 哲	にへいさとる	24, 36
丹羽 勝	にわまさる	29
沼山 博	ぬまやまひろし	31

ハ

橋上 愛子	はしがみあいこ	13, 14, 17
橋本 采栄	はしもとさえ	31
畠 文槻	はたふみき	36
服部 環	はっとりたまき	31
埴田 健司	はにたけんじ	28
濱 保久	はまやすひさ	30
林 潔	はやしきよし	21, 29
林 幸範	はやしのりゆき	28
原 健之	はらたけゆき	27
原 みのり	はらみのり	33
日向野 智子	ひゅうがのともこ	28
廣島 克佳	ひろしまかつよし	34
福島 朋子	ふくしまともこ	31
福原 眞知子	ふくはらまちこ	22
藤田 悟郎	ふじたごろう	37
藤田 主一	ふじたしゅいち	19, 22, 34
藤原 勇	ふじわらいさむ	31
Bryan Sherman	ぶらいあん・しゃーまん	13, 15, 17
古橋 朋果	ふるはしともか	31
古屋 健	ふるやたけし	30

星 洋	ほしひろし	29
細田 聡	ほそださとし	36
堀内 俊孝	ほりうちとしたか	38
堀内 勇吾	ほりうちゆうご	33
本庄 勝	ほんじょうまさる	30
本多 麻子	ほんだあさこ	38
本多 祥悟	ほんだしょうご	36

マ

鉤 治雄	まがりはるお	27
増南 太志	ますなみたいじ	37
松木 祐馬	まつきゆうま	35
松田 健太郎	まつだけんたろう	36
馬淵 里都	まぶちりと	31
眞谷 国光	まみやくにみつ	13, 16
三島 浩路	みしまこうじ	30, 33
水野 愛美	みずのまなみ	30
三田村 南美	みたむらみなみ	30
宮川 裕基	みやがわゆうき	27
三好 駿之介	みよししゅんのすけ	31
向井 智哉	むかいともや	35
村上 裕子	むらかみゆうこ	20
村田 教枝	むらたのりえ	24
村松 真至	むらまつまさし	33
森泉 慎吾	もりいずみしんご	31
森田 亜矢子	もりたあやこ	27

ヤ

山岡 淳	やまおかきよし	30, 35
山岡 重行	やまおかしげゆき	35
山岡 駿介	やまおかしゅんすけ	30
山際 勇一郎	やまぎわゆういちろう	31
山口 真莉	やまぐちまり	36
山本 勝則	やまもとかつのり	29
山本 孝子	やまもとたかこ	22
山本 睦	やまもとちか	31
横田 正夫	よこたまさお	18, 22, 34
米山 暁夫	よねやまあきお	30
余村 朋樹	よむらともき	36

ラ	<hr/>		
	李 同帰	りとんぐ	21
ワ	<hr/>		
	和田 佳子	わだけいこ	34
	渡部 名美	わたなべなみ	30
	渡辺 茉耶	わたなべまや	30
	綿村 英一郎	わたむらえいいちろう	32

日本応用心理学会第 86 回大会 賛助団体等御芳名

本学会の開催にあたり、下記団体・企業の皆様方からご協賛をいただくことができました。
深く感謝し、御礼申し上げます。

株式会社 エクサウィザーズ	東京海上日動メディカルサービス 株式会社
株式会社 風間書房	株式会社 ナカニシヤ出版
株式会社 北大路書房	株式会社 日本能率協会マネジメントセンター
株式会社 クロス・マーケティング	福村出版 株式会社
啓明出版 株式会社	株式会社 ブックマン京都
特定非営利活動法人 このはな児童学研究所	株式会社 有斐閣
株式会社 三京房	楽天インサイト 株式会社

(敬称略・五十音順)

本学会の開催にあたり、下記団体からご協力をいただくことができました。
深く感謝し、御礼申し上げます。

一般財団法人 日本心理学諸学会連合心理学検定局

日本大学管弦楽団

本学会の開催にあたり、下記団体の皆様方からご後援をいただくことができました。
深く感謝し、御礼申し上げます。

学校法人 日本大学商学部

本大会を開催するにあたり、上記の諸団体より多大なご支援を賜りました。
ここに、その御芳名を記して感謝の意を表します。

2019年8月吉日

日本応用心理学会第 86 回大会
大会委員長 外島 裕

日本応用心理学会第86回大会委員会

大会委員長	外島 裕	日本大学	商学部
大会事務局長	時田 学	日本大学	商学部
大会副事務局長	山本 真菜	日本大学	商学部
事務局幹事	深見 将志	日本大学	商学部
委員	武田 圭太	日本大学	商学部
委員	中川 充	日本大学	商学部
委員	井上 裕珠	日本大学	商学部
委員	堀尾 志保	日本大学	商学部
委員	河田 美智子	日本大学	商学部
大会顧問	横田 正夫	日本大学	文理学部
委員	和田 万紀	日本大学	法学部
委員	河野 千佳	日本大学	文理学部
委員	加藤 恭子	日本大学	経済学部
委員	櫻井 研司	日本大学	経済学部
委員	吉野 大輔	日本大学	芸術学部
委員	伊坂 裕子	日本大学	国際関係学部
委員	木村 敦	日本大学	危機管理学部
委員	種子島 尚志	日本大学	スポーツ科学部
委員	山崎 晴美	日本大学	歯学部
委員	眞邊 一近	日本大学大学院総合社会情報研究科	生物資源科学部
委員	田中 堅一郎	日本大学大学院総合社会情報研究科	

委員補助

外島ゼミナール

佐藤 裕弥	遠藤 慧	中園 翔太	阿部 花菜子	田崎 ほのか	生沼 萌	三田村 南美
小林 史佳	長部 楓	後藤 祐里奈	伊東 拓海	山口 真莉	本多 祥悟	白谷 海都
柴田 隼	佐藤 優希	櫻井 怜奈	村松 真至	可児 佑吾	伊東 拓海	大塚 涼平
堀内 勇吾	杉山 怜香	市川 春奈	高橋 香貴恵	原 みのり	板倉 悠斗	菊池 夏帆

時田ゼミナール

飯田 浩市	長尾 萌	米山 友太	三浦 明日香	荒川 玲子	西村 健太郎	松岡 実穂
雨宮 純菜	阿部 舜起	山岡 駿介	水野 愛美	高橋 七海	渡辺 茉耶	岡野谷 和花
中上 博絵	渡部 名美	志村 麻実	渡邊 黎次郎	長田 浩哉	東郷 紅吏	波田 雄杜
小野 琢人	安重 友香	平元 美穂	市村 さくら	丸山 莉奈		

武田ゼミナール

高岡 海音	田中 温大	四宮 知世
-------	-------	-------

井上ゼミナール

海野 瑠香	大川 隼外	佐藤 一真	佐藤 大樹	張替 彩椰	村上 史帆	吉岡 里佳
和田 絵梨奈	小嶋 優花	坂本 拓海	柴田 江玲奈	庄子 遼	杉田 篤也	畠 文槻
古橋 朋果	松田 健太郎	馬淵 里都	三好 駿之介			

山本総合研究

宗方 しおり	増田 那知	松浦 芽衣那	入江 修己	山川 秀明	地曳 拓渡	佐藤 優太
大原 舞香	松本 智宏	松浦 克哉	後藤 剛	藤井 丈嗣	堀井 太久郎	

日本応用心理学会第 86 回大会プログラム

発行日	2019 年 7 月 30 日
発行者	日本応用心理学会 第 86 回大会委員長 外島 裕
	〒157-8570 東京都世田谷区砧 5 - 2 - 1
印刷・製本	株式会社 正文社